



私の歩いた山々

八ヶ岳

私の歩いた山々

「八ヶ岳」(地域研究)

私の歩いた山々「八ヶ岳連峰」

一、八ヶ岳（南・北）の山々

二、南・八ヶ岳の山々

天女山・権現岳・赤岳・真教寺尾根
硫黄岳・横岳・赤岳・阿弥陀岳
天女山・美し森

三、北・八ヶ岳の山

本沢温泉・夏沢峠・硫黄岳・天狗岳
麦草峠・天狗岳・ニュー・白駒池
麦草峠・縞枯山・雨池峠・八柱山
大河原峠・双子山・北横岳・亀甲池
女乃神茶屋・蓼科山・天祥寺原

四、若かりし頃の八ヶ岳

赤岳・地獄谷（登稜会）
稲子岳・南壁・東壁（登稜会）
赤岳・西面（登稜会）
黒百合平・天狗岳（山仲間）
黒百合平・天狗岳・白駒池（大学仲間）



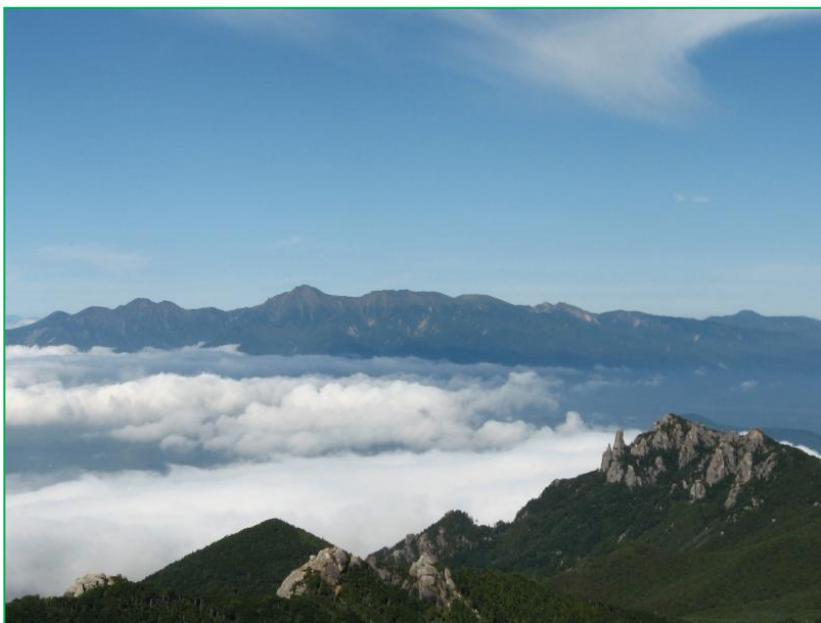
八ヶ岳・盟主 赤岳（横岳の稜線から見る…遠景は南アルプス）

一、八ヶ岳(南・北)の山々

八ヶ岳はその標高からいっても、その風格からしても、押しも押されぬわが国第一級の高山であるが、ふもとから眺めるこの山はそんな高距も量感も全く感じさせない。それはこの山の麓にひろがる広大な裾野と、目に見えないアプローチの長さが呼びおこす錯覚で、山麓を歩いて私はそのことを切実に感じる。∴。麓の八ツは低くやさしい山だが、本当の八ツは高く厳しい油断のならぬ山なのである。∴これは、写真家の「田淵行男」の写真集にある八ヶ岳についての一節である。

八ヶ岳連峰は、ほぼ中間の「夏沢峠」を境に以南を南八ヶ岳、以北を北八ヶ岳と区分して呼ばれる。南八ヶ岳は主峰・赤岳を中心に権現岳や横岳、阿弥陀岳など峻険なピークがそびえ、アルペンムードを放っている。その景観は日本アルプスにも匹敵する。対照的に北八ヶ岳は、おだやかな山並みが広がり、針葉樹の原生林に囲まれた山上湖や明るい草原が点在している。

私にとっての八ヶ岳は、若い時も、再開してからも何度も訪れている親しみのある山々である。特に、改めて登り歩きまわった北八ヶ岳の山々はとても印象深い。



奥秩父金峰山の登りから八ヶ岳連峰を望む

二、南・八ヶ岳の山々

南八ヶ岳の個性的なピークはアルプスの山並みにもひけをとらない。兜のような岩峰、ダイナミックな岩稜。とりわけ権現岳と赤岳は、互いに稜線で結びあいながらも、両座の鞍部のキレットが深く切れ込み大きな標高差が生じている。地形もけわしく、スリリングな岩稜や急峻なルンゼがある。このコース、キレット越えは上級グレードに位置付けられているとか。奥秩父や麓の美し森からみても、標高差四〇〇mに及ぶ、その切れ込みがはつきりとわかる。

私自身もキレット越えは、主峰・赤岳へ至るコースのなかで、一番変化に富んで面白いと感じる。さらに、直接、赤岳に登り詰める真教寺尾根も、全長二五〇mで二段に続く岩場・鎖場は、私は下りだったので過剰に感じたのかもしれないが、「恐怖」にすらとらわれた。

南八ヶ岳で印象に残るのは、若い時の山岳会の冬の合宿で、赤岳・権現岳の稜線に突き上げる地獄谷の沢や稜にルートを取った山行である。地獄谷本谷から赤岳、天狗尾根から赤岳、ツルネ東稜から権現岳など、さらに夏の赤岳沢からの赤岳、権現沢から落雷に見舞われ恐怖した権現岳、など私の記憶にも刻み込まれ、会報の記録にも残っている。



旭岳からキレット・天狗尾根・赤岳を望む

天女山・権現岳・赤岳・真教寺尾根・美の森（一）

（二〇〇八年 一月一六・一七日）



三ツ頭から権現岳・山頂岩峰を望む

●清里・美し森へ

八ヶ岳を南側から登る計画を立てた。北アルプスへのアクセスに比べて、八ヶ岳は近い。早割り対象の「甲府昭和IC」にまだ暗いうちに着く。ここから長坂ICまでは二〇分足らず。通勤割引の対象の六時過ぎに着くよう調整する。長坂ICからは、八ヶ岳の長い裾野を小海線の甲斐大泉駅を目指す。そこから天女山方面へさらに登っていく。八ヶ岳高原ライン（天女山入り口）を右折して、美し森を目指す。長坂ICから三〇分足らずで、何回か訪れている「美し森の駐車場」（写真）についた。



●美し森・駐車場から八ヶ岳牧場

美し森（「うつくしのもり？」）の駐車場で、朝食（おにぎりと、家で沸かしたお湯をポットで持参しトン汁を作る）を済ませ、七時少し前に出発。美し森展望台に行かず、林道を歩く。「たかね荘」や「羽衣の池」への道を分け、三〇

分ほどで川俣川（この奥に昔懐かしい地獄谷がある：登稜会の夏の合宿が数年にわたって行われた：私も沢・尾根沿いにいくつかのルートを夏冬に登った）に出る。飛び石伝いに川を渡り、林道を左手に尾根を巻くように行くと突然、視界が開け牧草地に躍り出た。牛が放牧されていた。ここが八ヶ岳牧場らしい。緑の牧草が広がっている。下にはまきば公園が見える。山側は、空があくまでも青く、権現岳や深く切れ込んでいるキレット、そして赤岳が見える。

樹林帯に入り、右手に牧草地が広がるのを見て歩くと、八時少し過ぎに展望台に出た。前方には南アルプスの甲斐駒ヶ岳から北岳（間ノ岳も？）、そして鳳凰三山が連なる。北岳は冠雪しているように見える。振り返れば八ヶ岳連峰が間近にある（写真）。また牧草地を歩き再び樹林帯に入ると、天女山・駐車場への道路に出る。横切って深い樹林帯をひとしきり登り天女山に着いた。



● 天の河原・二千m道標

天女山に九時前に着いた。休みを入れて二時間の高原の遊歩となった。山頂で記念撮影。正面にこれから向かう三つ頭・権現岳（写真）が聳えている。道標に導かれて少し登ると「天の河原・標高一六二〇m」に出た。南アルプスが素晴らしい。ここから本格的な登山道となる。地図では等高線が広くなだらかな登りが前三つ頭まで続きそうだ。少し腹ごしらえをして九時二〇分出発。なだらかな尾根筋を、紅葉を楽しみながら、一〇時三〇分に標高二〇〇〇mを示す道標に着いた。

● 道標から前三つ頭

「前三つ頭」は標高三三六四m。左手はガレ場が広がり、右手も樹木が低くなり森林限界に近い。一一時四〇分に着いた。真つ青だった空にも雲がいくつも浮かぶようになった。南アも雲がかぶっている。真上はやや黒味のある雲が



陽を遮っている。下にはゴルフ場や市街地が広がっている。少し休む。今日はじめて登山者が追いついてきた。この後下山者に二人会う。時間的に朝早く日帰り登山のようだ。

●三つ頭、権現岳

八ヶ岳神社からのルートを合わせ、三つ頭までガイドでは五〇分とある。高低差は二〇〇m強、なだらかな登りが続きそうだ。合流点を経て三つ頭に一二時四五分到着。一時間強かかった。目的の権現岳や、キレットを経た赤岳・中岳・阿弥陀岳が、一気に眼前に広がる(写真)。素晴らしい展望だ。先ほどの登山者が山頂で食事していた。もう少し先のハイマツに囲まれた場所で休み、軽く食事とする。二三時一〇分出発。



●権現岳・山頂

三つ頭からやや下りになり、再び樹林帯に入る。正面は

権現岳の岩のピークが聳える。近づくると岩屏風のように行く手を遮る。その手前から左手に巻くようにルートがあり、小尾根を巻くとなだらかな斜面に出て、その先に山頂と思われる二つの岩のピークが見えた。山頂には丁度一四時に着いた。山頂では何人かの登山者に出会う。記念写真を撮りあう。山頂からは登ってきた天女山ルート、編笠山ルート(青年小屋が見える)、目を転じて深いキレット、そして赤岳・阿弥陀岳、間に横岳、さらには硫黄岳まで見える。

●権現小屋

頂上直下の権現小屋に入る。先着の方と小屋で話す。私は楽しみのビール+ウイを作り、コーンフレークをつまみに飲む。ご夫婦が二組到着。小屋番も戻り、ランプの薄暗い夕食(カレー)をはさんで、消灯の二〇時まで、山の話に盛り上がる。良き人たちと出会う



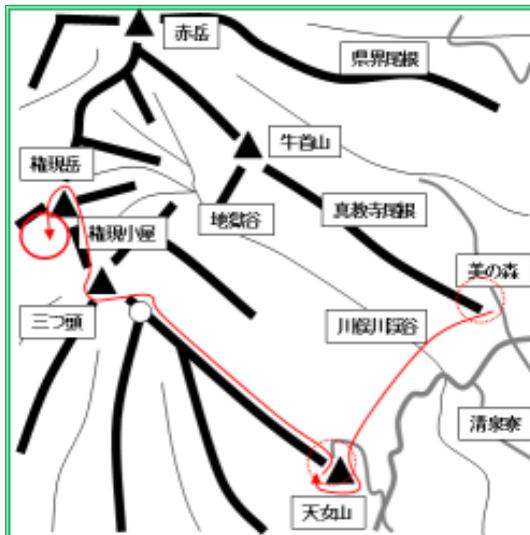
と、小屋泊まりの良さが倍に感じる。

【私の記録】

<美し森から「権現岳」…2008. 10. 16-17>



● 「登山ルート」



● 「目的地までの交通機関・自動車コース」

往路…自宅＝4.00－調布＝4.30－105.5km・1.20－甲府昭和＝5.50－27Km・0.20－
長坂IC＝6.10－甲斐大泉経由・八ヶ岳横断道路・0.20－美の森・駐車場＝6.30

● 「登山タイム」

1日目…美し森＝6.50－(1.10)－展望台＝8.00－(0.50)－天女山(1528m)・天の河原
＝8.50 天の河原＝8.50～9.20－(1.10)－標高 2000m＝10.30－(1.10)－前三つ頭
(2364m)＝11.40～12.00－(0.45)－三つ頭＝12.45－(1.15)－権現岳(2715m)・小屋
＝14.00～14.30

天女山・権現岳・赤岳・真教寺尾根・美の森 (二)

(二〇〇八年 一〇月一六・一七日)



真教寺尾根の分岐から赤岳山頂を望む

●権現岳の下りから旭岳へ

五時三〇分からの食事で、六時には出発できた。清里は雲海の下になり、権現の岩峰が朝日に赤らんでいる(写真・上)。いよいよ長い鉄梯子の下りが始まる。朝の冷え込みと霜で、軍手に鉄梯子の冷たさが伝わる。足下は霧が流れ「高度感」に脅かされることはない。何十段か「結構長く感じた梯子の下り(写真・下)から、鎖の岩場下りに変わる。鞍部まで緊張が続いた。岩場とハイマツの道を三〇分ほど登ると旭岳のピークに立つ。赤岳・阿弥陀岳が一段と近く。キレットを越える霧が流れて距離感がつかめない。



●旭岳からツルネ・キレット（小屋分岐）

さらにあまり高低差のない岩とハイマツの道を二〇分ほどでツルネ・ピークに着く。キレットを流れていた霧が飛び、赤岳へのルート of の全貌が見通せる（写真）。旭岳もツルネも山頂を示すものはない。



ここからキレット（標高約二四五〇m）までさらに一段と下る。霜の降りた岩場は滑りやすく、ハイマツはズボンをぬらす。地獄谷の沢筋が幾重にも枝分かれしている。樹林帯の中にある、最低鞍部のキレット小屋分岐には七時三〇分に着いた。ガイドには一時間一〇分とある。二〇分のオーバーとなった。

●キレットからルンゼ、天狗尾根の岩峰

ここからは登り一方となる。二五〇〇mのピークまで来ると、天狗尾根の岩峰がせり上がり、険しさを増してくる。ハイマツもなくなり岩場・ガレ場をジクザク登っていく。

ここで赤岳から下ってきた。パーティーとすれ違う。八時に、「ルンゼ」下に着いた。見上げる岩のガラ場に鎖とペンキのルートマークがある。誰も降りてこないことを確認して登り始める。二〇分足らずだが、落石は怖い。

●岩峰から真教寺尾根・分岐、赤岳

ルンゼ状の岩場から岩尾根を右手から跨ぐと、阿弥陀岳と中岳が間近になっていた。天狗尾根の岩峰を巻き岩場・鎖場を登る。この辺も気が抜けない。九時少し過ぎに、最初の文三郎新道への分岐道標に着いた。振り返ると、キレット・権現岳と辿ってきた

道が見え、その上の先に北岳、右手には甲斐駒ヶ岳・仙丈ヶ岳、左手には鳳凰三山と素晴らしい展望が開けていた（写真）。さらに岩場を登ると、真教寺尾根の分岐があり、その先にまた、文三郎新道への分岐道標があった。鉄梯子を上つて、九時四〇分に赤岳神社のある赤岳山頂に着いた。



●赤岳山頂、岩場から樹林帯の長い尾根筋の道

赤岳山頂小屋前で、食事にする。しかし、前日の残りの焼きおにぎりなど、水と一緒にでも喉を通らない。羊羹や甘納豆、チョコなどムリヤリ詰め込む。朝方の雲や霧はなくなり、突き抜けるような秋の青空が広がる。三六〇度の展望だ。北アも乗鞍・御岳も、木曾駒も、先ほどの南アも、そして北八つの蓼科も、奥秩父の山々も、さらに富士山も。

先は長いので一〇時過ぎに下り始める。真教寺尾根の分岐には一〇時半到着。足元注意の看板に心して鎖を手を取



り下り始める。下が見えないのは恐怖だ。岩場は、標高差三〇〇mほどを、二段に分かれて続く(写真・上)。ガイドでは鎖場が全長二五〇m続くとある。下りは高度感がもろに出るので、神経が磨り減る。アップザイレンの要領で行けばいいのだが、慎重に足場を選ぶ。二段目の下りの手前で、登ってきた登山者に会った。お互いに情報交換する。この下にさらに鎖場が長く続くという。その二段目の岩場・鎖場も同じくらい長く神経を使った。牛首山に続く平に見える尾根筋が近づいてくる。この先の「足場注意」の標識(一一時三〇分)で岩場が終わったのを知る。

岩場終了からなだらかな森林帯の道までさらに時間がかった。そして標高二三〇〇m付近のほぼ平らな道が、扇山・牛首山まで延々と続いた。牛首山に着いたのが一三時丁度、結局、真教寺尾根分岐から、岩を下り、森林帯を歩いて、休みナシで二時間三〇分しかかったことになる(ガイドは二時間一〇分)。



●扇山・牛首山から賽の河原、羽衣の池、美し森

牛首山からは苦にならない下りが続き、カラマツ、ナナカマド(?)などの紅葉が目を楽しませてくれる。ほぼ予定通り「賽の河原」(写真・上)に到着。清里スキー場のリフト乗り場に着いた。乗ろうかと聞いたたら片道で一千円という。即、歩くことにして「羽衣の池」を目指す。笹原と樹林帯の中を四〇分、干上がった池につく(写真・下)。そこから美し森展望台に出た。赤岳を仰ぎ見て山行の無事と素晴らしい感動に感謝した。疲れ切った足を引きずり駐車場に一五時丁度に着いた。食べ物を受け付けず、水だけで



四時間三〇分、さすがにへロへロになった。

●まとめ

今回はキレットの通過が目的(楽しみ)だった。若かりし登稜会(山岳会)時代の夏・冬合宿で、「赤岳沢から赤岳・真教寺尾根の下り」、「ツルネ東稜から権現岳」、「地獄谷から天狗尾根・赤岳」など会報の記録にある。今回の山旅では「よくもこんなところを…」の思いだった。

権現岳の下り、キレットからの赤岳へのルンゼの登り、真教寺尾根の岩場の下りは、鎖があってもナカナカのもので、結構、慎重さを要求された。でも、旭岳やツルネのピークからの、キレットに流れる霧の先に、朝日を浴びて聳える赤岳・天狗の岩峰(写真)は素晴らしかった。二日間の総歩数は約四六〇〇〇歩。赤岳からの「水」だけの四時間以上の長丁場の下りは結構辛かった。



【私の記録】

<権現岳「赤岳」真教寺…2008.10.16-17>



● 「登山ルート」



● 「登山タイム」

2日目…権現小屋・権現岳=6.00-(1.15)—ツルネ=7.15-(0.15)—キレット小屋分岐=7.30-(0.30)—ルンゼ状ガレ場下=8.00-(1.00)—文三郎分岐=9.00-(0.40)—赤岳(2899m)=9.40~10.10-(0.20)—尾根分岐=10.30-(1.00)—岩場鎖場終了=11.30-(1.30)—牛首山(2280m)=13.00-(1.00)—賽の河原=14.00-(羽衣池経由1.00)—美の森・駐車場=15.00

● 「目的地までの交通機関・自動車コース」

帰路…美の森・駐車場=15.45—長坂IC=16.20—95Km・1.10—相模湖=17.20—50km・0.30—高井戸=18.00—自宅=18.30

赤岳鉱泉・赤岳・阿弥陀岳・行者小屋（一）

（二〇〇八年 七月二九・三〇日）



赤岩の頭から硫黄岳を望む

●美濃戸口の八ヶ岳山荘

「調布」から中央道を「甲府昭和」まで走り、ここで割引のための「アウト・イン」をして、再び、八ヶ岳の裾野の登りを走ると「諏訪南IC」に着いた。早割り・通勤割りを活用した約二時間の高速道。八ヶ岳の峰々が朝の青空の中に連なつて聳えていた。諏訪南から美濃戸口まで、左右に広がる高原野菜の農地を貫いている、非常に整備された農道（舗装道路）を、山側に向かってほぼ直線的に進む。途中、白樺湖・美濃戸口の分岐を曲がると、程なく美濃戸口の「八ヶ岳山荘」前の駐車場に着いた。（写真）先着の車



もあり、茅野駅始発のバスも到着して何人かの登山者が出発の準備をしていた。

●林道を美濃戸山荘へ

準備を終えて予定の七時少し前に出発した。駐車場先を左手に進み美濃戸を目指す。美濃戸までは約四五分の車の通る砂利の林道歩きが続く。赤岳山荘の駐車場は結構車が泊まっていた（こちらは一日千円、下は一日五百円）。木の橋を渡り美濃戸山荘の前に出る（写真・上）。ここで一息入れ、エネルギーを補充して、北沢（赤岳鉱泉）・南沢（行者



小屋）の分岐を、左手の赤岳鉱泉への林道を歩く。

●美濃戸山荘から赤岳鉱泉

美濃戸山荘からダート林道を一時間ほどを歩くと終点に堰堤があり、メートル幅の木橋を渡ると北沢沿いの登山道になる。沢沿いの涼風が心地よい（写真・上）。この辺から様々な「お花」との出会いが始まる。写真撮影が「息継ぎ（息を整える）」になって調子も良い。途中、カラの「背負子」を担いだ二人（多分、赤岳鉱泉の従業員）が下っていた。花と渓谷の美しさに思わずのんびりとしてしまう。



●赤岳鉱泉

V字型に開けた空に、大同心・小同心と思われる岩稜・岩峰が聳えている。先ほど下つていったうちの一人に追い越される。大きな荷物(「メロン」もあった)なのに実に速足だった。途中で分岐した(沢筋が増水時の)巻き道を合わせるの間もなく、小屋付近の開けた場所(冬場には、ここに鉄パイプでやぐらを組んで氷壁登攀訓練用のアイスフールを作るといふ)に出た。左に回りこむと、小屋の入り口・水場、テラス・ベンチがあり、大勢の先客(多くは下山してきた人達)が休んでいた(写真)。私も水を補充し、時間に余裕があるのでしばし休む。

●赤岩の頭

右手に行くと「行者小屋」へ、「赤岩の頭・硫黄岳」へは正面の樹林帯の登りとなる。ここからガイドにある一時間半の本格的な登りが続く。登り始めから左手にトラバース気味



に進み、大同心沢の道標を見て、樹林帯の登りに入る。花も咲いておらず、ただひたすら登る。ここで、後からの登山者に追い越される(この方と赤岩の頭まで何度か前後する：硫黄岳山荘泊まりで、小屋で名刺交換：同い年のGさんと知る)。

森林限界が近づき、南側の展望が開けるようになると、横岳・赤岳・阿弥陀岳の特徴ある峰々と稜線が目前に開けてきた(写真)。右手に回りこむように行くと、正面に硫黄岳と思われるピークが見えた。辿りついた鞍部のようなところに「赤岩の頭」の道標があった。

赤岩の頭の道標の先の広いガレ場に、紺色の上下のジャージを着た中学生の集団が休憩していた。これが、小屋の予約のとき言っていた、地元中学生の「毎年の恒例の登山」とわかった。このあと、彼らとは、硫黄岳山荘から翌日の赤岳・行者小屋・美濃戸まで何やかやと交わること



になる。私は長い休みを取り、生徒全員（百人くらい）が出発したあとにゆっくり山頂を目指した。途中に「コマクサ」の群生地があった。

●硫黄岳山頂と火口

山頂に着くと霧が流れていた（写真・上）。それでも北側には、足元の夏沢峠を挟んで「東西の天狗岳」が見え、その先に「蓼科山」が見えた。ガレ場の頂上のケルンの道標で記念撮影。有名な噴火・火口をのぞきに行く（写真・下）。自然の荒々しさ。小雨模様になり急いで小屋を目指して下



る。いくつかの大きなケルンの道標に導かれて横岳方面へ下る。長野側からの風・霧の流れが厳しい。

●硫黄岳山荘

小屋では先着した中学生が騒いでいた。手続きをして、綺麗なトイレで用を足し、「ウイ」を用意して、休憩室・談話室に入る。Gさんが「八ヶ岳の花」の本を読んでいた。しばし語らう。中学生の団体の同宿のため、このスペースで食事し、その後、寝床にするという。

食事は山小屋としては良い方だった。生ビールも頂いた（ウイは持っていった分、時間もあり全部飲んでしまった）。

食後、地元の消防署の方とも話した。八時過ぎに寝て一時頃目覚める。外は「星が降るが」とき天空で、快晴を期待した。



【私の記録】

<権現岳「赤岳」真教寺…2008. 10. 16-17>



●「登山ルート」



●目的地までの交通機関・自動車コース

往路…自宅=4.00—調布IC=4.30—105Km・1.20—甲府昭和(早割)=6.00—50Km
・0.30—諏訪南IC=6.30—10km・0.15—美濃戸口・駐車場=6.45~7.00

●登山コース・タイム

1日目…美濃戸口=7.00—(1.00)—美濃戸=8.00—(2.20)—赤岳鉱泉=10.20~
10.30—(1.50)—赤岩の頭=12.20~12.50—(0.30)—硫黄岳(2742m)=13.20~13.30
—(0.20)—硫黄岳山荘=13.50

赤岳鉱泉・赤岳・阿弥陀岳・行者小屋(二)

(二〇〇八年 七月二九・三〇日)



横岳稜線から赤岳・阿弥陀岳を望む

●硫黄岳山荘の「来光

食事の用意の音や、早立ちの人達の物音で目覚める。服を着て荷物を持ち寝床を離れる(LEDの懐中電灯を忘れる・紛失)。来光は四時五〇分、小屋の前に既に大勢の泊り客が待っている(写真・上)。山梨側(北杜市・清里など)の麓は雲の下にあり、奥秩父の山々の左手から「陽」は登るようだ。いつもの感動が訪れる。私より年配の方が陽に向かい合掌していた。横岳もきれいに見えた(写真・下)。朝食もまずまず。ただ、昨日飲み過ぎなのか食欲が今ひとつだった。納豆でゴハン一杯だけにする。



●山荘から横岳の岩場伝い

中学生の出発の前にと思ったが第一陣は既先行していた。予定の六時前に小屋を後にした。快晴の早朝の登山は素晴らしい。稜線なので展望も抜群で、北アルプス・乗鞍岳や御嶽山・中央アルプス、そして横岳・赤岳越しに南アルプスが一望できる。足元は、育成されている「コマクサ」や、自生の「チシマギキョウ」が目を楽しませてくれる。

先行していた中学生が騒いでいる。横岳の何箇所かの「岩場・鎖場」に差し掛かっていた（写真）。彼らの先生方や地元山岳会などボランティアが何人かで、生徒たちをガードしていた。私も見守られながら快適に通過した。横岳は遠めには平らな稜線に見えるが、結構岩場の細かいアップダウンがあり気が抜けない。

●大同心・小同心の岩場

岩場・鎖場を過ぎると横



岳の頂上だった。中学生たちが山頂道標の周囲を譲ってくれた。記念写真を頼んだ。長野県の山頂・山名道標は〇〇〇とダンゴ状になっているのが特徴のようだ。横岳の下りから、日陰の長野側を見ると大同心・小同心の沢のツメの岩壁・岩峰が凄みを帯びて迫る。冬のこのコースは結構グレードが高いのだろう（昔、登稜先輩も挑戦した）。

ここから赤岳天望荘まで一時間以上ある。横岳の名前のあるいくつかのピークを岩場の登り降りをこなしていく。正面の赤岳（写真）、その背景に南アルプス北部の峰々、左手遠くに富士山が、これ以上ないという快晴の紺碧の空に聳えている。

●天望荘と赤岳山頂の展望

左（山梨側）から杣添尾根を合わせ、さらに右手（長野側）から地藏尾根をあわせると、ほどなく赤岳の肩に位置



する、風力発電で有名な赤岳天望荘の前に出る。暫し休んで、赤岳の最後の登りに挑む、先行者の登っているのが見える。約四〇分の登り（写真・上）。

頂上小屋が山頂（北側）を占拠していてあまり広くない。直ぐ近くの南側のピークには祠（赤岳神社：写真・下）があり、その下がやや広くなっていた。北側のベンチで休んでいると「ヘリ」が飛んできた。天望荘近くから人を吊り上げ、茅野方面へ飛び去っていった。祠から少し左手に下がっていくと、「阿弥陀岳」と「権現岳」への分岐がある。権現岳や足元のキレットは霧の中にあった。



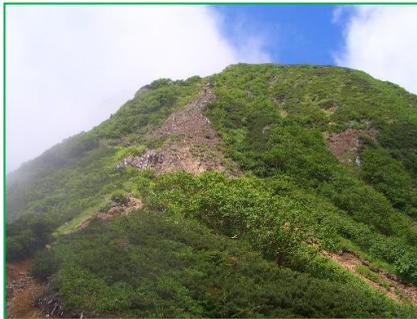
● 赤岳山頂から中岳・中岳のコル

権現岳への分岐から、赤岳山頂・直下の岩場を巻くように下る。鎖場が多く、この時間（九時過ぎ）、行者小屋から文三郎登山道を登ってきた人達と出会い、待ち時間が長くなる。文三郎登山道の分岐からは岩場や急な下りから開放され、ガレ・ザレ場を中岳へ向かって下る。遠目からは赤岳と阿弥陀岳に挟まれた小さなピークだったが、鞍部から見るとなかなか大きい。

中岳のピークからは阿弥陀岳の登りがさらに大きく急峻に見える（写真）。下りで「おーい」の叫び声……。叫んだと思われる人が、何事もないように下ってくるのが見えたので、われわれも先を急ぐ。行者小屋へ下るコルに出た。

● 阿弥陀岳往復

コルから見上げる阿弥陀岳への登りの急さは凄い。足で



登るといふより手足を使って攀じるといふ感じだ。コルに荷物を置いてデジカメと水筒だけで登る（ガイドでは登り二五分・下り二〇分とあるが）。とにかく急で岩登りに近い。しかも岩が浮いていて落石の危険もある。帰りが心配になる。振り返ると赤岳が霧にまかれてなかなかその山容を見せない。横岳の稜線からの山容と違い、こちらからは「厳つい感じ」がする。

阿弥陀岳の山頂からやつとその全容を見せた。下りは大勢で接近して下ると危険なので少し山頂に止まる。権現岳方面は見えないまま。後から登ってきた人に写真を撮ってもらい下りに入る。

● 行者小屋・美濃戸・美濃戸口駐車場

コルでは、例の中学生たちと一緒にになった。なかなか元気が良く、おしゃべりに余念がない。先生も大変だな…と思う。行者小屋でGさんに会う。先行の中学生たちの後に



ついできたという。阿弥陀岳はバスしたらしい。行者小屋（写真）で「山菜蕎麦」を食べる。これで二時間半以上の駐車場までの行程だがお腹は持つか。中学生たちと一緒に沢沿い歩きとなった。途中で珍しい花「ギンリョウソウ」を、中学生の学校の先生が見つけて教えてくれた。美濃戸山荘からの林道歩きは、ブヨがしつこくまとわり着き、ところかまわず刺しに来る。

登山再開から随分と長い間「いつかは必ず」と思っていた「赤岳」に登ることが出来た。ガイドの写真で見た「赤岳」の本物が目の前に広がっている。セピア色の記憶（二〇代の頃の美濃戸から、また清里側からの登山）と何も結びつかない。山容は当然変わっていないはずだが。ただひたすら、過激さを求めていたころの精神は、穏やかな尾根道や連なる山々の佇まいなど、意識の端にもおかなかったのかもしれない。



【花の記録】

<「八ヶ岳」…2008.10.16-17>

■八ヶ岳・硫黄岳・横岳・赤岳・阿弥陀岳の縦走で見た 花の仲間たち。



↑ホタルブクロ



↑シナノオドリギ



↑イワオトギリ(?)



↑????



↑ハクサンチドリ



↑オニシモツケ(?)



↑キバナオダマキ



↑クルマユリ



↑????



↑????



↑ミヤマキンポウゲ



↑チシマギキョウ



↑オンダテ(?)



↑ヨツバシオガマ



↑コマクサ



↑ホソバツメクサ(?)

【花の記録】

<「八ヶ岳」…2008. 10. 16-17>

■八ヶ岳-硫黄岳-横岳-赤岳-阿弥陀岳の縦走で見た花の仲間たち。



↑ミネウスユキソウ



↑ミヤマキンバイ



↑ゴゼンタチヂ



↑ギンリョウソウ



↑硫黄岳-山荘周辺の コマクサ



↑横岳の岩湯の隠れの チシマガキョウ



↑阿弥陀岳の登りの岩肌の ミヤママンネグサ



↑阿弥陀-中岳コル付近の イブキシヤコソウ

「天女山・美し森」

二〇〇七年 五月八日



清里・美し森から牛首山・赤岳を望む

●天女山から美し森へ 八ヶ岳連峰展望コース

白州付近で、南アの甲斐駒ヶ岳・鳳凰三山の展望を楽しみ撮影した後、小淵沢ICの道標を頼りに右折する。中央道を横切ると八ヶ岳山麓の高原道路に入る（この道はすこし前まで有料だった）。

天女山への道標に導かれて登ると、駐車場があり編笠山・権現岳への登山口となっている。駐車場先に「天女山・山頂」があり先ほど見てきた、南アの甲斐駒・早川尾根、鳳凰三山が見える。



天女山から高原道路をさらに行くと、ドライブインがありそこから八ヶ岳主峰の赤岳・権現岳が見える(写真)。その間のキレットは、手前の山に隠れており相当の上り下り(標高差)のようだ。

清泉寮への分岐を過ぎて美し森下の駐車場に行く。一〇分程の階段を登ると展望台に着く。ここは赤岳へ直登する真教寺尾根の登山口でもある。今日は午後も春霞にはならず終日展望に恵まれた。八ヶ岳の雪はやや少なかった。



● 帰路― ぶどう峠・志賀坂峠を越えて秩父へ

清里高原からの帰路は、野辺山の先から川上村に出て、馬越峠から南相木村・北相木村を通り、ぶどう峠を越えて上野村を通り二九九号で志賀坂峠を越え、秩父に出た。中津川林道の方が悪路だが時間的に早いし距離的にも近い。

● 帰路― 三国峠(舗装) 経由 中津川林道(ダート)

毛木平から梓山まで戻り、三国峠への道に行く。峠には一二時五〇分到着、バイク族が昼食していた。林道の状況を聞く。通行可能とのこと即出発。ドライブシフトは「LとS」を繰り返して慎重に下る。時速制限は一五キロだった。一二時四〇分にふれあいの森(ここから舗装)に着く。車のホコリ払い・タイヤの小石取りをした。

秩父から一般道で行くか、寄居での有料道路(四一〇円)でいくか迷ったが、夕方混む時間帯になりそうなので有料に。道の駅・花園で買い物をして花園IC→練馬ICと関越利用。ここでうっかりしていて、一七時チョイ前に料金所を通過したため割引なしの千八百円取られてしまった(一部通勤割引適用だと千五百円)。早めの帰宅となった。

【私の記録】

<小淵沢から八ヶ岳高原道路…2007. 05. 08>

●「登山ルート」



■目的地までの交通機関・自動車コース

ぶどう峠ルート…小淵沢=11. 30-天女山=12. 10~20-美し森=12. 40~13. 20-川上村=13. 40-南・北相木村=14. 20-ぶどう峠=14. 50 上野村=15. 30. -志賀坂峠=16. 00-秩父市=17. 00-皆野寄居有料・花園 I C=-関越道-自宅=18. 15

中津川林道ルート…清里-川上村分岐 (14. 00) -廻り目平・毛木平分岐-三国峠林道入口・舗装 (14. 30) -三国峠 (14. 50) -中津川林道入口・ダート (15. 00) -体験の森・ふれあいの森・舗装 (16. 00) -中津川・三峰口・秩父 (17. 00) -皆野寄居有料道経由・花園 I C (17. 45) -関越道・練馬 I C (18. 30) -自宅 (18. 45)

三、北・八ヶ岳の山々

北八ッは森の高地である。鬱蒼とした針葉樹の原生林がいちめんに、なだらかな山々の起伏を被い、山奥の澄んだ湖がひっそりと森のしじまを映している。この裏八ヶ岳ともいふべき陰の濃い山域には、八ヶ岳の本峰である南八ヶ岳の、あの気負い立ったような激しさと鋭さはないが、そのかわり、いつまでも人の胸に残るような、奥ぶかい静けさに充ちたやすらぎがある。…この文は、「アルプ」の同人であり、「独標登高会」の設立者でもある「山口輝久」の著書の「北八ッ彷徨」の一節である。

若い時（山岳会時代）の北八ヶ岳といえば、稲子岳の岩登り合宿を真っ先に思い出す。その頃は渋の湯から黒百合平の小屋に入り、中山峠からミドリ池へ下り、稲子岳の岩を攀じて、山頂からニューを經由して小屋に戻った。

さらに、若い時（大学時代）では、渋の湯から黒百合平を経て天狗岳、高見石から白駒池へ出て、湖畔の白駒荘に宿泊したことを思い出す。また、働き盛りのころ、車利用の旅行で、麦草峠から白駒池を回り、野辺山の天文台を見てから、清里の「清泉寮」に泊ったことも思い出す。そのときの麦草峠への道もカラマツが黄金色に輝いていた。



小海から麦草峠への道、見事なカラマツの紅葉

本沢温泉・硫黄岳・天狗岳・中山峠(二)

(二〇二〇年一〇月一八・一九日)



本沢温泉先から露天風呂への分岐付近の紅葉

●松原湖から稲子湯

北八ヶ岳へのアクセスは通い慣れた道だ。早朝・通勤割引を使って半額で佐久まで来る(富岡ICで出入)。家を四時少し過ぎに出て、佐久平SAでトイレ休憩、時間調整して六時過ぎに佐久ICを出た。松原湖入口まで一四一号線を四〇分ほど走る。二車線の広い道が、来るたびに延長されている。

松原湖から「稲子湯」の道標に案内されて、八ヶ岳の大月川沿いの舗装道を走る。途中「本沢温泉」の分岐を見て、稲子湯(写真)の前を通り、その先に「ミドリ池入口」の駐車場があり七時少し過ぎに着いた(佐久から一時間)。

●ミドリ池・しらびそ小屋

月曜日なので、前日からの流れで駐車場はほぼ満車(一



○台程)に近い。途中で購入した朝食を食べて、予定通り七時半に出発した。ゲート脇に登山届があり投函する。ダートだが幅広い林道と、樹林帯の登山道を何度か入り混じりながら、少しづつ登る。針葉樹が多いが、所々紅葉している。ミドリ池は標高二〇四〇m位で三〇〇mほど登る。

途中、伐採工事・通行止めの看板やガードがあるも、朝早いので工事に入っていないと判断して進む。苔むした北八ヶ岳らしい道を進む。ガイドの写真で見た軌道(伐採した樹木を運んだ)が現れた。この辺は勾配が緩く、昔からの植樹された人工林が多いようだ。その先は、カラマツのやや黄金色に色づき始めた林が続いていた。

一時間半ほどで、ミドリ池(写真)とその畔の「しらびそ小屋」に着いた。思ったより小さい池だが、静かなたらずまいでいい。天狗岳の稜線が見え、少し先に行くと稲子岳の南壁が見える。湖畔の紅葉は、「シラビソ」や「コマツガ」など針葉樹の緑と、黄



色い葉を少し残したダケカンバの中に、「ななかまど」か「もみじ」なのか、真つ赤な木が一本、アクセントになっていた。小屋のワンちゃんが人恋しそうに、登山者用ベンチで休んでいる私を見つめていたのが印象的だった。

●しらびそ小屋から本沢温泉

ミドリ池を左に回り込むように行く。落ち葉が足にやさしい道をいく。先行するご夫婦に並び、中山峠への分岐で、峠から天狗岳を目指すご夫婦(京都から来たとか)と別れる。標高差のほとんどない、シラビソ・コマツガの苔むした樹林帯を時折日差しを浴びながら歩く。何とも快適、気持ちのいいひと時だ。

一時間近くで車の通れるやや広めの林道へ出て、本沢温泉の「小屋風の建物」(写真)に到着した。小屋前のベンチで朝食の余りを食べる。小屋番の女性たちにリンゴとカキを貰った。野天風呂から戻った登山者が、うまさうにビールを飲んでいた。



●本沢温泉から夏沢峠

一〇時四〇分に、夏沢峠經由硫黄岳の往復を目指して出発する。登り二時間、下り一時間半の予定だ。夏沢峠は「日本三大峠」に数えられたりする。確かに歴史ある峠道だけに歩きやすい。時折、硫黄岳方面の展望が開け、噴火口の荒々しい山肌が迫る。一時間ちようどで峠に着いた。

峠には小屋が二軒ありその間に躍り出た(写真)。展望は今まで辿ってきたミドリ池・本沢温泉側は開けているが、長野側は見えない。趣のある峠とは言えず、三天峠の残り一つを越えたにしては、いささか物足りない。



●夏沢峠から硫黄岳

夏沢峠から南にしばし樹林帯を行く。ガレ場の迂回を過ぎると、森林限界を超え始め、丈の低い灌木とハイマツの

岩混じりのきつくなった登り道を喘ぎながら登る(歩き始めて五時間目に疲れがどつとでる)。峠で見た、尖がった部分を越えると、平たく広がった硫黄岳・山頂へのなだらかな尾根筋が続く。一組のパーティーに出会う。いくつかの大きなケルンに導かれながらやつと、見覚えのある山頂(写真)にたどり着いた。

広い山頂には男女のへアがいたがまもなく赤岳鉱泉の方へ下って行った。霧が激しく動いており、横岳の大同心など岩峰が、現れたり消えたりしている。天狗岳方面は霧の中だ。寒いし、時間的にも迫っており、独りぼっちなので引き上げる。



●硫黄岳から夏沢峠・本沢温泉

登りに一時間二〇分もかかったのに、下りは三〇分足らずで峠に到着。峠からもひたすら下った。野天風呂の分岐に三〇分であつた。硫黄の臭いがきついこの広場の紅葉は

結構見応えがあった。

●本沢温泉の野天風呂

野天風呂の道標に沿って本谷沿いに下る。白のザレ場の斜面に道が刻まれている。手すりのついた、畳一枚分の板敷きの脱衣場（囲いはない）があり、やはり畳一枚分の湯あがりというか板敷きのついた湯殿がある。広さ一坪に満たず三〜四人入ると満員の狭さだ。

先客はおらず、気兼ねせずザツクを置き、脱衣場で裸になる。高所で谷間で陽もささず、さすがに寒く感じる。湯は白濁しており硫黄の臭いがきつい。湯温は四三°Cとあったがもつと低い感じだ。自分の入浴シーンを撮る。硫黄岳の噴火口壁が正面に見える。ほどなく、夫婦連れが到着した。奥さんが「水着だから大丈夫よ」といいつつ二人で入ってきた。写真を撮ってもらった。所沢から来たという。今日はここまで（本沢温泉）だという。

続いて年配の男性二人が近づいてきたが、女性がいるのに気付き引き返して行った。私は二〇分ほどで上がった。ご夫婦もほぼ一緒ぐらいに上がった。

●本沢温泉

本沢温泉の母屋は、普通の登山小屋とは異なり個室が多い。一番安い大部屋といっても、せいぜい二〇人程度（二段式で）。この日は秩父の山岳会の五人と、男性二人組、と私ひとりで、かなりガラガラ。あと個室のご夫婦が二組だった。六時からの食事まで、湯あがりです冷えたせいかわらぬにもぐりこんで、山岳会の人たちの宴会の騒ぎを聞いていた。夕食は天ぷらなど、あまり豪華とは言えない。八時には寝た。



【私の記録】

＜本沢温泉から「硫黄岳」…2010. 10. 18-19＞



●「登山ルート」



●目的地までの交通機関・自動車コース

往路…練馬 IC=4.30—関越道 98.7Km・1.00—富岡 IC(早割出入)=5.30—上信越道
・51Km・0.40—佐久 IC(通勤割)=6.10 —141 号線・33km(松原湖交差点)・1.00—
みどり池入口=7.10

●登山コース・タイム

1 日日…みどり池入口=7.30—(1.30)—しらびそ小屋=9.00—(0.10)—中山峠・
分岐=9.10—(1.10)—本沢温泉=10.20~10.40—(1.00)—夏沢峠=11.40—(1.20)
—硫黄岳=13.00~13.20—(0.30)—夏沢峠=13.50—(1.00)—野天風呂=14.40~
15.00—(0.10)—本沢温泉=15.10

本沢温泉・硫黄岳・天狗岳・中山峠(二)

(二〇一〇年一〇月一八・一九日)



根石岳の下りから東天狗岳・西天狗岳(左)

●朝食〜出発〜夏沢峠

六時半に食事、六時出発の予定が狂った。みそ汁のぶっかけごはんを腹に詰め込み、七時少し前に出発する。峠まで知ったる道を丁度一時間で到着。反対側の夏沢温泉からの団体五人と、根石小屋からのご夫婦に出会う。女性群の声高い会話が続く喧騒を避けて一〇分ほどで早々に夏沢峠を出発した。

●夏沢峠から根石岳・新道分岐

根石岳までは、縮枯れ風のなだらかな樹林帯が続き、朝方に登ってきた側(右)は鋭角に切れ落ち、反対側(左)はなだらかな勾配が続いている。地図で見るときわめて対照的だ(写真)。

朝日が差し込むが肌寒い樹間の道を進む。三〇分ほどで根石岳・根石小屋の



見える場所に着いた(箕冠山?)。はじめてみる東西の天狗岳の配置だ。左手に回り込むように進むと、オーレン小屋への分岐に出て、その下に根石小屋があった。

根石岳の手前の鞍部に小屋があり、風の通り道になっていた(写真・上)。寒いのでジャンパーを着た。白いザレ場を登ると「根石岳」だった。この山頂からは、硫黄岳の向こうに赤岳・阿弥陀岳が見え、さらに南アルプスや中央アルプスの山並みが見えていた(写真・下)。ここを下ると、本沢温泉からの「白砂新道」と合流点に到達した。



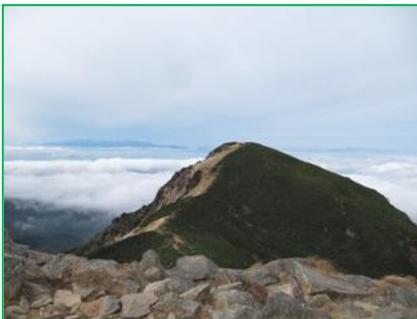
●新道分岐から東天狗岳

分岐手前の平坦なところで転び、手をすりむいた。大したことなくてよかった。ここで本沢温泉の小屋番の女の子と若い男性二人組と出会う。彼らの前で転んだので心配されてしまった。若い人たちに先に行ってもらう。

ここから東天狗まで標高差は一〇〇mに満たないが、結構キツイ登りが二段に続いた。東天狗岳の東側はすっぽり切れ落ちていて、脆そうな岩壁になっていた。山頂で、野天風呂で一緒だったご夫婦が先着しているかと思ったがまだおらず、別の、山ガール風の四人組みが居て、出発の用意をした。

●西天狗岳の往復

少し休んで、若い人たちの後に着いて、西天狗岳(今回初めて行く…写真)へ向かう。往復四〇分とガイドにあるが、行きも帰りも登りはさすがにつらい。



荷物を東天狗岳に置いてくれば良かったのだが、そのまま背負ってきてしまった。西天狗岳の山頂で若い人たちに写真撮ってもらおう。彼らや女の子も、先に戻って行った。また独りきりになった。申し訳ないがハイマツ帯に入り「キジ打ち」をする。お尻が寒風にさらされて寒い。この山頂からは一段と赤岳・阿弥陀岳が高く見えた。

東天狗岳と反対側から人声がして若い男性三人組が登ってきた。地図で調べると唐沢温泉（駐車場あり）からのルートだ。混んできたので東天狗岳に戻る。東天狗の山頂に戻ると、落ち合う約束をした所沢のご夫婦が山頂にいた。「やあやあ」と挨拶した。ご

夫婦はこれから西天狗岳に行くという。

●東天狗岳から中山峠

お別れして一〇時三〇分、中山峠に向かう。初めは岩峰の下りで気を使う。振りかえるとこちらからも、東天狗岳のゴツゴツさが際立つ（写真）。西天狗のたおやかな山



容とはずいぶんと違う。前回下った「天狗の奥庭」が左手に見える。結構奇岩累々といった感じた。右手は、稲子岳からニユウへの稜線と、ミドリ池への平原が広がっている。背丈の低い灌木から次第に樹林帯に入ると、中山峠が近づいてくる。黒百合ヒユツテからの道が合さると、寒々しい中山峠に着いた。

●中山峠からミドリ池・しらびそ小屋

食事を予定していたが、風の通り道であまりに寒く、一時二〇分下りに入る。地図でもわかるとおり、転げ落ちそうな急な道をジクザグに下る。二〇分ほどで勾配は和らぎ、北八ツらしい深い樹林帯の道になった。時折、岳樺や落葉樹の陽の射す明るい場所に出る。気分的にはホツとする。そこだけポツンと紅葉している。

ミドリ池の手前から、稲子岳の南壁（東壁か？）が見え始める（写真）。昔に



辿った取り付きへの道を探したが見つからない。もう誰もこの岩登りはしていないのだろう。ガレ場がずいぶんせり上がっていて、岩の崩壊が進んでいるようだ。勾配がなくなり平坦な道になり分岐に出てまもなく「しらびそ小屋」(写真)に着いた。

●ミドリ池入口駐車場



昼時(一二時半)なので、小屋で「信州そば」を御馳走になるうとしたが、炊事場の工事中とかでかなわず。湖畔で例のワンちゃんに見つめられながら「芋かりんとう」を食べた。

小屋から再び深い森林帯に入る。行きに見た伐採工事の通行止めをくぐり下り続けると、切り倒された樹木が散乱する伐採現場に出くわした。伐採道具が置いてあるが工事人はいない。登山道をふさぐ枝葉を分けながら下った。後からの人たちはどうなったのか？ 帰りは稲子湯に入って

帰るか迷ったが、時間的に難しいので、ここは次の機会に譲ることにした。

●まとめ

今回で「南北の八ヶ岳連峰」の点(山頂)と線(尾根)はほとんどつながった(唯一、雨池峠と北横岳が繋がっていない：坪庭は歩いたが)。これで「地域研究・八ヶ岳連峰」は完成できる。また「日本三大峠」の「夏沢峠」も歩けた。「峠」に関するテーマのまとめもできる。

もうひとつ、若い時の山岳会(登稜会)で登った稲子岳「南壁(合宿で二・三ルート登攀している)」を麓(中山峠からミドリ池近くまでの道)から見れたことも、二年前の「中山峠からニューウの道(こちらは帰り)」と合わせて、思い出づくりになった。

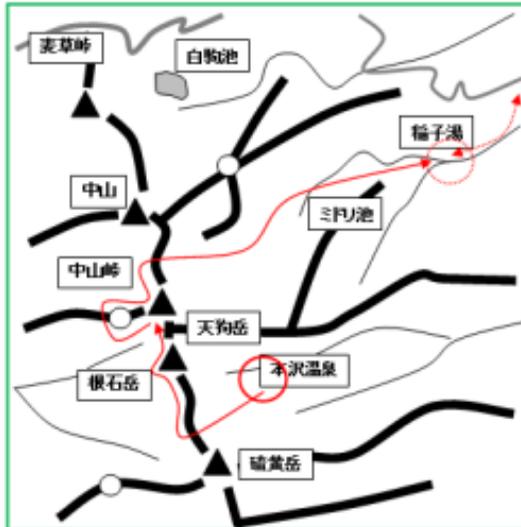
当時は「しらびそ小屋」はなく、黒百合ヒュッテ(おばあさんの時代)に泊まり、中山峠から往復した(行きはミドリ池近くまで下り岩壁の下へ、稲子岳へ登ってからは山頂からニューウを経由して中山峠まで)。

【私の記録】

＜夏沢峠から「天狗岳」…2010. 10. 18-19＞



●「登山ルート」



●登山コース・タイム

2日…本沢温泉＝7.00－(1.00)－夏沢峠＝8.10－(0.40)－根石岳＝8.50－(1.00)－東天狗＝9.30－(西天狗往復 1.00 休み含む)－東天狗＝10.30－(0.50)－中山峠＝11.20－(1.30)－中山峠・分岐＝12.20－(0.10)－しらびそ小屋＝12.30～12.50－(1.00)－みどり池入口・駐車場＝13.50～14.10

●目的地までの交通機関・自動車コース

帰路…みどり池入口＝14.10－稲子湯＝14.20－国道 299・141 号・1.00－佐久 IC＝15.30－上信関越 93.Km・1.00+54km・0.40－練馬 IC＝17.30

麦草峠・天狗岳・ニユウ・白駒池

(二〇〇八年一月二八日)



北八ヶ岳・中山の展望台付近の樹氷

●佐久から麦草峠

十数年も昔、この道を通り「麦草峠」手前の駐車場から「白駒の池」へ出て、帰りは「松原湖」を通り、清里の「清泉寮」に泊まった旅の記憶がある。そのときも落葉松の紅葉(?)…黄金の輝き…の印象が鮮明だ。今回もほぼ同じ季節、期待通りだった(写真)。

佐久ICを降りてから一四一号線を佐久穂まで走り、二九九号線に入る。八千穂高原のスキー場を過ぎると、まもなく白駒の池へ行く有料駐車場に出る、その先が麦草峠に出る(駐車場・トイレあり)。



●麦草峠から丸山・高見石

暖かい車の中で食事をとる。七時四〇分に出発。公共駐車場のトイレ脇から麦草ヒュッテ前の広場に出る。丸山方面の道標に導かれて、明るく開けた南側斜面を登る。シラビソなどの樹林帯の苔むした岩交じりの道を登る。

麦草峠と丸山の標高差は少なく、苦しい登りはないが滑りやすく歩きづらい。やがて木々の枝に霜のような白いものが目立ち始めた。雪だ。道にはほとんどなく、木々に樹氷のように雪が風に吹き付けられている。八時四〇分に丸山・山頂の道標に出る。

●高見石・中山展望台

やや下って、九時丁度に高見石小屋に出た。小屋番がテラスの雪かきをしていた。ここから又深い樹林帯に入る。道の積雪は所々にある程度だが、木々の枝の雪はびっしりと付着している（写真）。途中で単独者に出会う。

一〇時過ぎに、樹木が切れ、岩の累積している、南側が明るく開けた「中山」展望台に出た。別の単独者が休んでいた。にゆうから稲子湯へ降りるといふ今歩いてきた北側の樹林帯は、吹雪で吹き付けられた雪が樹氷となって広がっ



ている。青空と樹々の雪の白さが素晴らしい。間近には目指す天狗岳（写真）、遠くには中央アルプスの山々、足元には蓼科高原が広がっている。

●（東）天狗岳

展望台から三〇分ほどで中山峠に出た。「にゆう」へ行くという先ほどの単

独者がいた。手前の分岐を見落としたらしい。峠は天狗岳と標高差二〇〇m位しかなく、一時間程度で山頂にいけると踏む。岩ゴツで雪の付着した稜線を登る。左手に「にゆう」の岩のピークや「稲子岳」の岩肌（南壁）が見え、足元から「しらびそ小屋」や「稲子湯」のある、広く長い裾野が見渡らせる。東天狗岳の頂上近くは、岩道に雪がびっしりだった（ストック・アイゼンは持参するも使わず）。

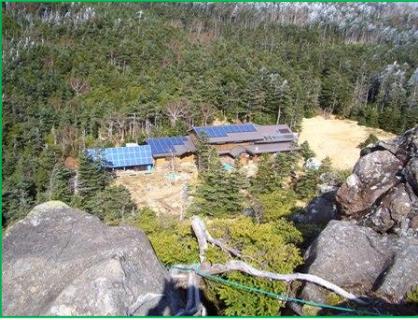
●天狗岳から黒百合平（黒百合ヒュッテ）

一一時四〇分、中山峠から一時間で東天狗岳の山頂に着



いた。数人の先着者がいた。四〇数年ぶりの天狗岳だ。北八ヶ岳方面は展望が開け、明日のルートが見通せる。しかし、南の硫黄岳から赤岳・阿弥陀岳には、霧が走り、全貌を見せてくれない(写真・上)。ただ、北側だけに、完全に冬山の山容になっている。

数人はガスを使って昼食をしていたが、風が強く寒いので早々に下る。登りとは別ルートの「天狗の裏庭」を通り「黒百合平」(写真・下)に出て、これも四〇数年ぶりの黒百合ヒュッテを通って中山峠に出た。岩の多い下りで景観はいいが足にはキツイ下りだ。



● 中山峠から「にゅう」

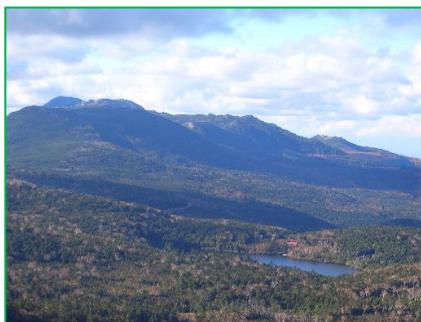
一三時二〇分、再び峠に立ち「にゅう」への分岐(写真・上)に向かう。二〇分ほどで分岐に出た。展望台の下りからは、道標を見落す可能性がある。

右手に稲子岳や硫黄岳・天狗岳を遠望しながら、樹林帯のゆるい下りを歩く(このルートを、四〇数年前の山岳会の合宿で稲子岳の南壁・東壁を登攀し、山頂から「にゅう」を経由して黒百合ヒュッテまで歩いた記憶がある)。



● 「にゆう」から白駒の池・麦草峠

一四時三〇分「にゆう」の岩のピークに着いた(写真・前頁下)。富士山や奥秩父、足元の八ヶ岳の裾野、また「白駒の池」から茶臼・縞枯山の峰と、展望は申し分ない(写真)。少し休んで食べて、時間に追われて出発、白駒の池までまた深い樹林帯の道となる。途中二ヶ所、稲子湯方面の分岐にあう。日が山肌落实到樹林帯ではやや暗くなり始めて心細くなった。一六時近くに湖畔(写真・下)に着いた。麦草峠にはさらに三〇分ほどかかった。



麦草峠・車中泊：二九九号線・麦草峠の両側の山の計画だったので、車中泊とした。車での麦草峠の登りで、天狗岳方面の峰々が「霜降りのように」だった。標高三三〇〇m 辺りから雪が出てきた。降ったばかりの様子だった。滑りやすかったが、素晴らしい景観を提供してくれた。



【私の記録】

＜麦草峠から「天狗岳」…2008. 10. 28-29＞



● 「登山ルート」



● 目的地までの交通機関・自動車コース

往路…練馬 IC=4.30—関越道 98.7Km・1.00—富岡 IC(早割出入)=5.30—上信越道
・51Km・0.40—佐久 IC(通勤割)=6.10 —141・299 号線・1.30—麦草峠・登山口=7.40

● 登山コース・タイム

1 日目…麦草峠・駐車場=7.40—(1.20)—高見石=9.00 —(1.10)—中山=10.10—
(0.30)—中山峠=10.40—(1.00)—東天狗岳 2640m=11.40~12.00—(1.40)—中山峠・
にゅう分岐=13.40—(0.50)—にゅう=14.30~14.50—(1.10)—白駒の池=16.00—
(0.30)—麦草峠=16.30(車中泊)

麦草峠・縞枯山・雨池・八柱山

(二〇〇八年一月二十九日)



縞枯山・山頂付近の枯れ木とエビの尻尾

●麦草峠で車中泊

初日(二八日)、天狗からニュー・白駒の池をめぐって、夕方四時半に駐車場に戻った。麦草峠に車中泊する。すでに夕闇が迫る気配で、寝床のセットや食事作りの準備をする。家から持参のビールを飲みながら。続いて恒例のビール+ウイを楽しむが寒くて、あとからホット・ウイに切り替える。牛丼を作り夕食にする。

●麦草峠から茶臼山

夜中に何度か目が覚める。明け方近くにセーターを着込み毛布を巻き込んでやつとウトウトした。朝は五時半過ぎからやつと明るくなった。車の中を片付け、六時から朝のカレーうどん・ライスを作る。とにかく寒い、零下になっているだろう。六時四五分に出発する。麦草峠まで車道を歩き、ヒュッテと反対側の登山道に入る(写真)。



大石峠までは、笹原とシラビンなどの樹林帯の緩やかな登りを行う。天候は風が強く霧が流れて寒い。ただ時折青空が広がり、陽が射し込んでくると暖かく感じる。七時半に手前のピークに着きしばし展望を楽しむ。そこから岩混じりのきつくなつた傾斜の登りが続き、八時に茶臼山の山頂、さらに数分で展望台（写真）に着いた。



●茶臼山から縞枯山

茶臼から少し下る。鞍部は立ち木が枯れた明るい場所、先に縞枯山のドームの山容が望め、名前の由来の「縞枯れ」が部分的に横帯状に見える。季節的には春のほうが見栄えはいいのか。縞枯山手前の展望台分岐に出た。

風が強く霧が流れているのでそのまま右手に曲がり山頂方面を目指す。稜線を歩く感じになると、枯れた立ち木の明るい場所に出る。ここでも立ち木に雪が張り付いていた。

●縞枯山から雨池峠

九時丁度に、展望の利かない「縞枯山」山頂道標に出た。少し休み、行動食を取る。ここからは又深い森のなかの道を下る。溝状にえぐれた岩の多い道で、凍っていたり濡れていたりで歩きづらい。この下りで三組の夫婦(?)に出合う。「坪庭」に出るピタラス・ロープウェイに乗ってきたという。縞枯山や北横岳を往復するらしい。木々が途絶え、途中明るくなったところから、北横岳・三つ岳・雨池山の稜線が見渡せる。

●雨池峠から雨池周遊

九時半過ぎに雨池峠についた（写真）。直進すれば雨池山（山頂付近に縞枯れあり）、右は大石林道・雨池、左は縞枯山荘から坪庭、ケーブル駅となる。とにかく風の通路で、吹きすさんでいた。雨池山も坪庭もあきらめて、大石林道の方へ降りる（ロープウェイ



と坪庭は一〇数年前に蓼科・白樺湖の観光で乗って歩いた記憶あり：写真・雨池峠)。三〇分ほどで「大石林道」につき一〇時半少し前に「雨池」に着いた。雨池は完全に干上がっていた。池の中を歩ける(写真・右)。

● 雨池から八柱山往復

途中まで池の中を歩くも、八柱山への分岐がどこかわからず、「周遊の歩道」に戻る。丁度半周位の所に分岐の道標があった。ここで昼食がわりに羊羹とビスケットなど行動食で済ませ、一一時に登り始める。

足元の笹原の緑が陽に輝く。「しらびそ」などの木々が風にざわめく。少しの登り



の後は、落ち葉を踏んでの心地よい漫步となった。八柱山の直前から、短いが急な登りとなった。小海側の裾野が開けると山頂だった。落葉松の紅葉が綺麗だ(写真・上左)。

● 雨池から麦草峠へ

一一時半に到着、写真を撮って下りに入る。途中「キジ打ち」をして、体が軽くなった。一二時一語分に雨池に戻った。池の南端から麦草峠へ向かう大石林道にでるはずが、完全に一周してしまった。

大石林道から大石峠を巻く道に入り、深い樹林帯を最後の力を振り絞り歩く(さほどの登りではないが空腹のため)。行き先が明るくなり、木道が出てきて麦草峠が近いことを知る(写真)。一三時四五分に着いた。

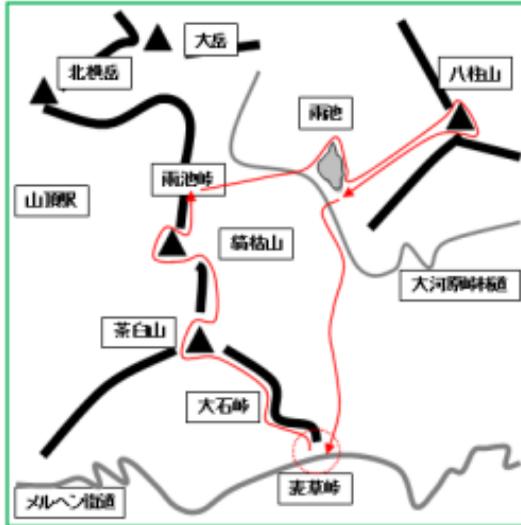
今回は名高い「北八ヶ岳の快適な池めぐり・森林歩き」とはいかなかった。季節的に秋ならもう少し早くか、雪解け、芽吹きの方が良いだろう。また時間的余裕が欲しい。でも「池巡り」「縮枯れ鑑賞」「黄金色のカラマツ」など楽しめた。

【私の記録】

<麦草峠から「縞枯岳」…2008. 10. 28-29>



●「登山ルート」



●登山コース・タイム

2日目…麦草峠・駐車場=6.45-(1.15)-茶臼山 2384m=8.00~8.20-(0.40)-縞枯山 2403m=9.00-(0.30)-雨池峠=9.30-(1.00)-雨池半周・休=10.20~11.00-(0.30)-八柱山=11.30~11.50-(0.20)-雨池・半周=12.10~12.30-(大石林道 1.40)-麦草峠=13.50

●目的地までの交通機関・自動車コース

帰路…麦草峠=15.00-国道 299・141 号・1.30-佐久 IC=16.30-上信関越 93.Km・1.00-花園 IC(通勤割)=17.40-54km・0.40-練馬 IC=18.10

大河原峠・双子山・北横岳・亀甲池

(二〇〇八年 六月一四日)



天狗の露地場岐付近から北横岳を見る

●登山口・大河原峠

先週の「蓼科山」登山の帰りに偵察しておいた「大河原峠・蓼科スカイライン」のアクセスコースを辿った。佐久ICからほぼ一時間・七時過ぎに峠に着く。既にかんりの車が止まっていたし、私の準備中も登山者の車が続々と到着していた。ほとんどが蓼科山方面のようだ。双子山方面は私独りだった。

●双子山・双子池

峠の道標に従い左手の笹原のゆるい登りに入る。ここもやはり岩の多い登山道だった。高山植物の養生のためか道脇にロープが張り巡らされていた。二〇分ほどの登りで双子山の広い高原状の頂に着く(写真)。笹原が広がり、

展望も三六〇度で、気分が爽快になる。佐久の市街が見える。奥秩父の山並みが遠い。これから辿る大岳から



北横岳への稜線が見え、その右手に「天祥寺原」の窪みを隔てた「蓼科山」が先週とは別の山容を見せていた。

山頂の端から「クロ松」

の樹林帯に入る。更に下って森林が深くなると「双子池ヒュッテ」の屋根が見え、やがて池が見えてくる。ヒュッテを挟み左右に「雄

池」「雌池」が広がる（写真）。静かな佇まいだ。ここで朝食代わりの「エネルギーと羊羹」を食す。出発間際、ヒュッテの管理人が話しかけてきた。これからのルートにはまだ残雪があるという。お礼を言ってお発。

●天狗の露地を経て大岳の分岐

池からは鬱蒼たる苔むした原生林の岩の道を全身を使って登る。三〇分過ぎると低い灌木やハイマツが現れ、大きな岩の上から双子池とヒュッテが見える。やがてなだらかな高原状の岩の累積するところに出る。「天狗の露地」とあ



る（写真）。一休みして、大岳方面へのキツイ登りに入る。ここもまた岩の道で手足を駆使しての全身での登りとなる。一時間近くでやっと大岳への分岐の道標にたどり着いた。

●岩尾根を北横岳へ

大岳山頂まで一五〇二

〇分の見込みだが、時間節

約のためパスする。大きな岩の折り重なる稜線を、やはり全身を使って行く。大岳からの尾根と、足元の岩稜線の合わさるところの先に北横岳ヒュッテの赤い屋根が見える。北横岳の最後の登りが始まり、左手足元に七ツ池と、その先に「赤岳など南八ヶ岳の峰々」が広がっていた。大きな岩の裾を回り込むと、北横岳の山頂に躍り出た。

●北横岳山頂・南峰往復

自分独りきりだったここまでと違い、山頂は人で賑わっていた。南峰が直ぐ向こうに連なっていた。休む前にそち



らに移動。ここはまた、何組かのグループが連続して登ってきた。多分、横岳のロープウエーから「坪庭」を経由して登ってきたのだろう。かなり遠くに見える南八ヶ岳の峰々（写真）や、足元から続く縞枯山・茶臼山などの山並みを確認して、また北峰に戻る。昼食は山頂の端でコンロを使い「カレーうどん・餅」を作り食す。美味しかった。暑くはなかった。黒ずんだ雲が頭上を覆い始めてやや不安になる。一二時三〇分、山頂を後にする。

● 亀甲池へ雪の下り

山頂から亀甲池（きつこういけ）まで一時間、そこから天祥寺原を経て大河原峠まで一時間半とガイドにある。一五時には峠の駐車場に着ける予定。山頂で会った人に聞くと、亀甲池までかなりの残雪があるという。来た道でも所々に残雪やアイスバーンがあったが、難しくは思わなかった。



はたして、山頂直下からかなり深い残雪が道を塞いでいた（写真）。グズ雪で何度かはまり込む。思いの外疲れた。雪がなくなつて下りが穏やかになると「亀甲池」の水面が見え始めた。

● 天祥寺原、大河原峠へ

今回の周遊は池を巡るコースとなった。山や尾根が複雑に入り組み、窪地を作つて周りの尾根や沢からの水を集めている。いずれの池も廻りは山に囲まれ、静かな佇まいを見せている。この亀甲池もさほど大きくない。

ここで団体さんと一緒になる。大河原ヒュッテに泊まるという。聞かなかつたが明日（日曜日）は蓼科山の計画



だろう。彼らと別れて、直ぐ近くの双子池・天祥寺原の分岐に出る。天祥寺原への道は正面に蓼科山を見て、笹原と新緑に映えるカラマツ林を縫うように歩く(写真・下)。キツイ下りで疲れた足に優しい。



天祥寺原からは、ゆったりとした登りが大河原峠まで続いた。陽射しはさほどではないが、風がなくさすがに暑い。右手から背後に、辿ってきた双子山から大岳、北横岳の稜線がぐるっと取り囲んでいた。赤いトンガリ屋根の小屋(写真・上)が見えると峠だった。

●まとめ

残雪の下りさえなければ、快適な池めぐり・峰めぐりの周遊コースだと思う。二・五万歩。花はもう少し後のようだ。



【私の記録】

〈大河原峠から「北横岳」…2008. 06. 14〉



●「登山ルート」



●登山コース・タイム

往路…大河原峠＝7.20－(0.20)－双子山＝7.40－(0.30)－双子池＝8.10～8.30－(0.50)－天狗の露地＝9.20－(1.00)－大岳・分岐＝10.20～10.30－(1.00)－北横岳 2480m＝11.30～12.30(南峰往復含む)

帰路…北横岳＝12.30－(1.00)－亀甲池＝13.30－(0.20)－天祥寺原・分岐＝13.50－(0.40)－大河原峠＝14.30～15.00

●目的地までの交通機関・自動車コース

往路…練馬 IC＝4.30－関越道 98.7Km・1.00－富岡 IC＝5.30－上信越道・51Km・0.40－佐久 IC＝6.10－蓼科スカイライン・1.00－大河原峠・登山口＝7.00

帰路…大河原峠＝15.00－蓼科スカイ 1.00－佐久 IC＝16.00－上信関越 93.Km・1.00－花園 IC＝17.10－54km・0.40－練馬 IC＝18.00 ～18.30

女乃茶屋・蓼科山

(二〇〇八年六月七日)



天祥寺原から蓼科山を見る

●蓼科山登山口・女乃神茶屋

朝四時に起きる。もう明るくなっている。四時三〇分には関越に乗る。練馬から富岡の一〇〇キロ近くを「早割」で行く。富岡ICから佐久ICまで五〇キロは「通割」で行く。佐久IC六時二〇分着。そこから一般道(二四一号・一四二号線)で白樺湖方面を約五〇分で、七時過ぎに女乃神茶屋・蓼科山登山口・駐車場(写真)に着いた。ほぼ予定通り。既に一〇台近くの車が集まっていた。私の後に続いて三台も到着。さすが有名どころだし土曜日だし、納得した。



●登山口から標高二二二二mピーク

七時二〇分に出発。標高は既に一七〇〇m程、蓼科山頂の二五三〇mまで、標高差八〇〇m超で、所要時間は二時間三〇分ぐらい。登山口から新緑のカラマツのなだらかな

登りを朝日を浴びながら行く。名も知らぬ鳥のさえずりが心地よい。足元の笹の露でズボンの裾が濡れるのがやや難点だが、やがてキツイ登りが始まり標高一八七〇mポイントの穏やかな平原にたどり着く。

振り返ると蓼科高原の裾野が広がっており、南アルプスか中央アルプスの雪の残る峰のつながりが見えた。樹間の道を進む。本当に緑が綺麗だ。ただ、花は全くといって見当たらない。季節的にまだ早いのか。

岩の多い登りがまた始まった。岩階段を登る感じだ(写真)。風がなく蒸し暑さ

でいささかへばる。周囲が開けると「蓼科山・南西・標高二一・一二m」の道標があった。



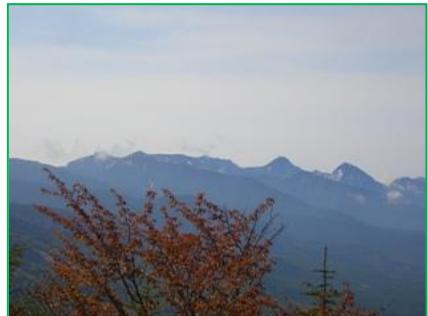
●ピークから蓼科山頂・山頂めぐり

振り返ると「南八ヶ岳」「南アルプス」「中央アルプス」

の峰々が、湧き上がり広がりつつある雲の間に顔をのぞかせている。南八ヶ岳の赤岳に連なる峰々は黒々として雪はないようだ(写真)。南アの甲斐駒ヶ岳・仙丈ヶ岳(多分?…この方角からの山容は見慣れていないので)には、まだまだ雪が多い。

ピークから樹間のなだらかな登りが続き、再び岩混じりの急登が始まる。標高差は四〇〇m・一時間少しのアルバイトとなる。一番苦しいところだ。後からの何人・何組かの登山者に追いつかれ、山頂近くの岩場に入ったところで、女性の入ったパーティーとご夫婦を追い越した。

本当に岩だらけ…、草木もなく花もない。「山頂ヒュッテ」から左手に山頂道標を目指す。山頂には数人既において、後から次々登ってくる。将軍平からの登山者が多い。中央の窪み(火口跡)の鳥居と祠にお参りして、北側の展望台(山座同定盤)に着く。



途中で出会った「松本在住」の方と再び出会い、双眼鏡で穂高・槍ヶ岳を追った。展望台からは、足元に白樺湖、その先に美ヶ原、朝通つてきた女神湖も見えた（写真）。

南側（八ヶ岳・南アルプス方面）は雲が沸き立ち山々を隠してしまっていた。北アルプスの穂高から槍が望める。北アルプスの峰々の白い連なりをこの距離から見るのは初めてだ。松本の方と山の話をしながら展望を楽しみ、軽く昼食を済ませ一一時に出発する。

●将軍平・天祥寺原・竜源橋

山頂から将軍平までは、続けて登ってくる登山者と、滑りやすい残雪・泥んことの格闘となる。二〇分ほどで将軍平・蓼科山荘に着き、そのまま天祥寺原へ下る。岩混じりの下りは気を使う。途中から河原に出て、また樹間に入る。傾斜が緩むと深い笹原になり、水の流れる登山道を更に下る。天祥寺原の分岐からは、正面に北横岳、振り返ると降



りてきた蓼科山が見える。笹原とカラマツの新緑の中を、疲れのきた足だが心地よく歩けた（写真）。

約二・六万歩で、将軍平から天祥寺原への下りと、竜源橋から女乃神茶屋への、舗装道路の二〇分近くの歩きがきつかった。

女神湖へ戻り、十字路を

右折してスキー場の方へ進み、大河原峠への道に入る。途中で七合目登山口の駐車場を通る。登山者も車も結構多い。蓼科御泉水自然公園を過ぎると、道はいかにも林道らしくなり大河原峠近くでは落石・倒木が道を塞いでいるところもあった。駐車場から二〇分ほどで大河原峠に着いた。

大河原峠からは「蓼科スカイライン」を下る。こちらの方がくねりが多いが、通行者も少なく、快適なドライブとなった。佐久の市街へは一時間かからずに下り、佐久ICは予定の一六時前に高速に入った。

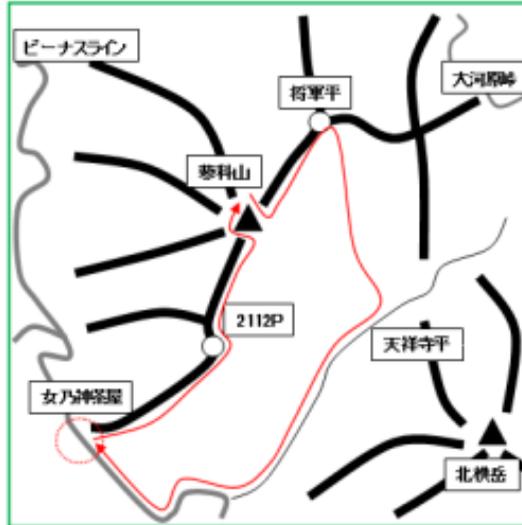


【私の記録】

＜女乃神茶屋から「蓼科山」…2008. 06. 07＞



●「登山ルート」



●登山コース・タイム

往路…登山口・駐車場＝7.20－(1.10)－2112ピーク＝8.30－(1.40)－蓼科山 2530m
＝10.10～11.00

帰路…蓼科山＝11.00—(0.20)—将軍平＝11.20—(1.00)—天祥寺原＝12.20—(1.10)
—竜源橋＝13.30—(0.20)—登山口・駐車場＝13.50

●目的地までの交通機関・自動車コース

往路…練馬 IC＝4.30—関越道 98.7Km・1.00—富岡 IC＝5.30—上信越道・51Km・0.40
—佐久 IC＝6.10—女神湖経由 1.00—蓼科山・登山口＝7.10～7.30

帰路…登山口・駐車場＝14.15—(0.30)—大河原峠＝14.45—蓼科スカイ 1.00—佐久 IC
＝15.45—上信関越 93.Km・1.00—花園 IC＝17.10—54km・0.40—練馬 IC＝18.00

四、若かりし頃の八ヶ岳

若い時の八ヶ岳の登山は、ほとんどが登稜会（山岳会）時代のものだ。しかも、尾根からの登山・峰々の縦走というより、岩や沢の登攀が、そして夏も準備としていくつかのルートに登ったが、冬・雪の季節が主流であった。

しかも南八ヶ岳・赤岳から権現岳の東面、赤岳から阿弥陀岳の西面、北八ヶ岳では稲子岳の南壁と地域的にもかなり限定されている。しかも私の登稜会時代の積雪期の登攀・登山はこの八ヶ岳・赤岳周辺だけである。

私の岩登りは、丹沢周辺と谷川岳周辺、さらにこの八ヶ岳周辺に回数的には集中している。ビックイイベントとしては、北アルプスの奥又白からの「前穂高東壁・四峰」、南アルプスの大権沢からの「北岳バットレス・中央稜・第四尾根」があるが、それぞれひと夏の合宿の成果でしかない。

登山を再開して、やはり一番思い出深いのは、この八ヶ岳である。権現岳からキレットを下り赤岳へ登ったコースでは、ツルネや天狗尾根が懐かしく思い起こされ、中山峠からニューウのコース、ミドリ池や稲子岳の麓めぐりもなつかしい。それだけ八ヶ岳には思い出が多いということだ。



八ヶ岳・赤岳山頂から横岳方面

八ヶ岳・地獄谷（登稜会）

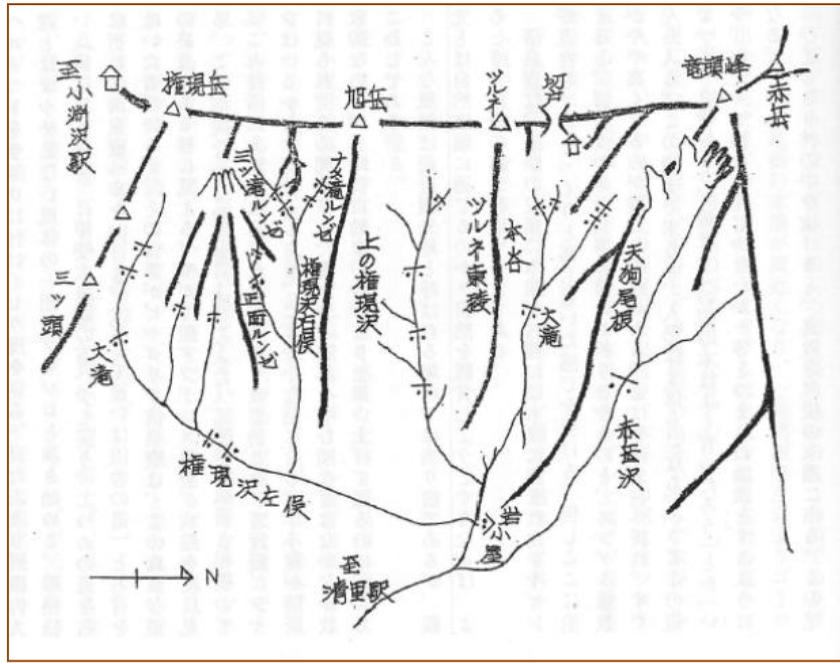
■ 八ヶ岳東面における活動状況と地獄谷支流の登攀

（一九六六年・昭和四十一年度会報：記録・柳 稜）

南北に細長く伸び広大な裾野を持つ八ヶ岳連峯は、特に夏沢峠を境とする南部に於て、そのアルペンのな山容と共に、谷筋に数多くのバリエーションルートを持っている。その内、八ヶ岳最悪と云われている地獄谷各支流の登攀に、我々は昭和三十七年七月より、昭和四十年七月迄の三年間力をつくした。

これら各ルートの登攀は、下山を含めて通常二日間を要すると云われていたが、三十七年七月の偵察により、日帰り可能と判断し、その後、無雪期の登攀はすべてこれに依っている。この流域の山行により、我々は、長いアプローチに対するネバリと体力、気力の鍛錬、又静かなふんいきを持つ八ヶ岳の一面を知ることが出来た。

権現岳より赤岳へ伸びる八ヶ岳主脈東面より流下する各沢は合流して上流では地獄谷、下流では川俣川と云われ、八ヶ岳連峯に於けるバリエーションルートとしては、上級



に属する各ルートを、とることが出来る。権現沢左股。右股ナメ滝ルンゼ・正面ルンゼ。三ツ滝ルンゼ上の権現沢。地獄谷本谷。赤岳沢・尾根筋では、天狗尾根・ツルネ東稜・本谷・上の権現沢・権現沢左股を登つたに過ぎない。残された各ルートに登攀こそ今後の課題である。

無雪期に於て各ルートの内最も困難なのは、やはり三ツ滝ルンゼ大滝の登攀であろう。岩はもろく、ハーケンは殆んど効かず、スリッパは絶対に許されない。又ナメ滝ルンゼ第一の滝。正面ルンゼ上部・権現沢左股の大滝もかなり悪い。上の権現沢はさして問題なく、赤岳沢は、大滝より上は快適なルンゼ状態でぐんぐん登れるが、詰め約百米程の壁はもろく、注意を要する。本谷は下降に利用出来る。

積雪期のこれらの各沢は、当然の事ながら雪崩の危険が大きい。三十八年の正月の合宿に上の権現沢を登つた四名が上部に於いて、午前十一時頃表層ナダンに飛ばされた記録がある。三月から四月初旬にかけての雪の安定している時でも、雪崩の危険は弱まるが、東面のため陽が早く当り雪がゆるんでアイゼンが団子になって、スリッパの恐れがあるので、夜間より早朝にかけての登攀が望ましい。

ベースは、赤岳沢出合や上流の岩小屋がよく、多数の定

着合宿には、本谷と下の権現沢の出合付近がよい。なお我々は無雪期は、全部日帰りで登つたが、行動時間は約十時間から十二時間、かなりの強行である。帰路は、赤岳沢を除いて、権現岳より棒道・小淵沢への道をとつた。

我々の第一歩は、小海線の小さな高原の駅、清里より始まる。いつもは静かなこの駅も日曜の朝は、美し森や天女山、飯盛山へ向かうハイカーでにぎわいを見せる。「ああぬむいなあ」だれかが問伸びした声を出す。「さあ行くか」、ヘルメットをザックに付け、しり皮をぶら下げたあまり周囲とはマッチしない風体の一団がゾロゾロと歩き始める。



線路伝い（実は立入禁止）に甲斐大泉駅の方へ少し戻り、二つめの道を右に折れ、清泉寮へ歩を向ける。「近くて遠いは田舎の道」（写真）と名言を吐いた者がいるが、その言葉がピッタリで清泉寮は、この真直な道の終点にある様に見える。やがて聖アンデレス教会、病院を左に見る。この病院なかなか清潔な感じを受け、周囲の風景と相俟って「こんな所に入院すればどんな病気でも直ぐ治るな、看護婦にシヤンはいるか」等ひとしきり、にぎやかな話になる。

牛小屋が随所に見られ、その間伸びした鳴声や、牧草を喰む図などはなかなか牧歌的だ。こんな風景は最近観光地と呼ばれる場所では当り前であるが、観光とは自然破壊に通じるのか？自然を觀賞しようとするならば、よろしく、自分の脚を利用すべきである。

清泉寮（写真・上下）は、道路の左側に本館、右側には木立に囲まれたキャビンが点在して、しゅくりと落ち着いた感じを受ける。但しここ



37. 12. 31. ~ 38. 1. 4.
八ヶ岳 冬山合宿 清泉寮



に泊まると、胃袋泣かせの食事の前にお祈りをやるのと、エンゲル係数がやや高くなるのが難点との評がある。道はやがて右へ折れ、すぐ左へ入る。この辺まで来ると、人影はまばらになる。「さてこの辺で」という事になり、後で「の辺の本はよく育つだろう」とか「いや、かえって枯れる」等とつまらぬ論議をするようになる。

ひとしきり林の中を抜けると、真教寺尾根の末端に出る。この尾根も馬鹿長い尾根だ。大野君と二人で赤岳沢の帰路これを駆ける様に下ったが、汽車の時間に間に合わすためのあせりも加っていいかげん頭に来た想い出がある。

ここで左側の路に入る。三十九年夏に行った時は、車が通れる位のりっぱな道が出来ていたが、以前は「いよいよ山に入るんだ」という気がした。ここからは権現沢上部がよく見え、緊張感が湧く。すぐ左へ下る路が、天女山へ通じているが、右へ行くと、笹やぶを通り抜けやがて河床へ下りる。路はここで終る。清里駅より約一時間半である。

荒涼とした河原の彼方に稜線が一きわ高く見え、全く静かだ。伏流になっている河原は、進むにつれてますます荒れ、沢幅三十米位の所もあり、残雪期や新雪期、雪がゆるんでしばしば転石の間に落ち込むのもこの辺である。

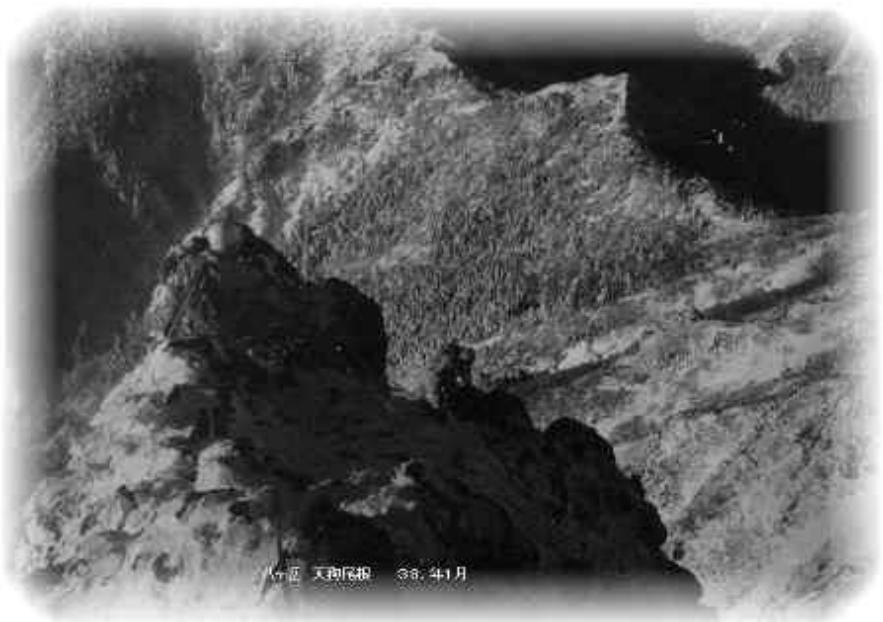
やがて天狗尾根の末端が間近くなり、一時間程で左岩よりゴロの出合を見せて、赤岳沢が流入する。この上流やはり左岸の高みによい岩小屋があり、積雪期のベースになる。更に進むと五分程で、本谷と下の権現沢の出合である。

本谷へ少し入って、すぐ左へ、上の権現沢が出合い、本谷との間にはツルネ束稜の取付点がある。下の権現沢も本谷出合わずか上流で、右股左股の分岐になる。

「じゃ権現岳でまってるよ」、我々は闘志を燃やして黙々と、各ルートへ散って行くのである。



八ヶ岳 冬山合宿



八ヶ岳 天狗尾根 33. 4. 1月

■ 八ヶ岳東面・地獄谷本谷より赤岳

(一九六三年・昭和三十八年一月三日：記録・早坂)

パーティー：星野・大野・大里・花岡・早坂

タイム：BC(六・四〇)―大滝(七・二〇)―二俣(八・

二〇)―キレット(八・四〇)―小屋(九・二

〇)―赤岳(二〇・五〇)―二俣(二二・二〇)―天狗

尾根分岐(二二・四〇)―キレット小屋(二二・

一〇)―ツルネ(二二・三〇)―四〇)―BC(二

三・二〇)

入山以来今日で五日目そろそろ疲れも出るころに寝不足も手伝ってシユラフをたたむ動作も何となく鈍いようだ。

それでも今日のアタックを思って、夜明けにはまだ早い表に出てみれば、マ

イナス一〇度の気

温が、いつもの緊

張感を醸し出して

くれるから期待だ。

「ウーン、今日

も一丁戴きだ」。地

獄谷がほのぼの明



けたころBCを後にする。天気はあまり良くないようだが気にすることはない。登稜会自慢？のラーメン餅スタミナも十分、権現、上の権現のパーティーを見送って、快適にラッセルを交代しつつ行けばまもなく大滝に出る。何のことはない。期待した大滝だったがグズグズの氷を右側より簡単に登る。大滝の上ですぐ天狗沢が入る。

この辺のゴルジュが通れず仕方なく急斜面をアイゼンを利かせて高巻きにかかったが途中で「カッコイイ」からと記念写真をパチリとやる。最高によそいきの顔だ。パーティーはますます快調に本谷を登れば二俣に出る。水が出ていて通れず、ここはゴルジュをへツリ気味にルートをとる、また二俣になったところで今度は左に入ればキレット小屋に着いた。小屋の中はかなり荒れていたが中の文句が面白い。実弾だとか空砲だとかのなかなかの迷文が板壁に書かれてあり、山男イコール名文家？ばかりと感心する。

良く冷えている大福など口にしながら赤岳に向かう。稜線はかなりの風が吹いていてもすれば吹き飛ばされそうになりながら根気よくキレットを登り、やっと頂上に着いたときはパーティー全員がジイサンよろしく眉毛を白くしてフーフー息を弾ませていた。キレットからの登りではあまり人影も見当たらなかったが、さすが赤岳は八ヶ岳の盟

主だけのことはあり、登山者でいっぱいだ。

吹き抜けの頂上小屋で少休の後キレットを下ってツルネに向かう。ツルネで少しばかり待ち、上の権現沢。パーティーと合流して、東稜を下れば森林帯に入りBCに着いた。

■ 八ヶ岳東面・ツルネ東稜より権現岳往復

(一九六三年・昭和三八年一月五日：記録・武井)

パーティー：星野・大野・武井

タイム：BC(五・四五)―ツルネ東稜取付点(六・〇

〇)―ツルネ(八・三〇)―権現岳・頂上(一

一・〇〇〇)―ツルネ(一一・三〇)―BC(一

二・三〇〇)

今日は合宿最後の日である。今日中に下山することになっているので、急いで権現岳まで往復してこようと元氣よくBCを後にする。ツルネ東稜は、夏なら何もないうまらな尾根なのに、冬ともなれば条件が違う。深い雪に悩まされながらラッセルを交代して急な雪稜を登る。ボサの間よりみる赤岳はさすがにどっしりとして風格を感じるし、天狗尾根の岩峰は意欲をそそる。キレット小屋の尾根が右

手に見えてから間もなくツルネに到着する。取り付けから二時間半もかかってしまった。ラッセルに疲れた体を休めて、軽い食事をとりながら景色を見渡す。それにしてもよい天気だ。惑わされて長居しないよう早々に権現岳に向かう。あまり長く休むと動くのが嫌になるからでもある。

稜線は風に飛ばされてあまり雪が付いていないが、ところどころにある雪は氷のように固く、アイゼンがよく聞いて気持ちがいい。旭岳を超えて最後の登りである権現岳にとりつく。傾斜はかなり急で岩の出ているところもあったが難なく頂上に着いた。

権現岳からの展望は「ゴキゲン」南アや富士はもちろん中央や北アルプスが見渡せる。どの山をとっても皆きれいで素晴らしい。登稜会に入って初めての冬山合宿で、これほど天気がよく雪の状態も良い時に登ることができて本当に幸せである。

のんびりと一時間ほど頂上においてから帰路につく。登ってきたルートをそのまま下るので心配はいらない。ツルネからの下りは、グリセートとシリセードを楽しんでBCに戻った。

■八ヶ岳東面・天狗尾根より赤岳往復

(一九六三年・昭和三十八年一月三日)

(注・この項は仲間の記録・時間を援用している)

パーティ：森本・星野・大野

タイム：BC(四・五五)―天狗尾根末端(五・三五)

- ―岸壁下(六・五五)〜七・〇五)―大天狗上(九・〇〇)
- ―主稜(九・四五)―赤岳・頂上(一〇・一〇)〜一〇・二〇)―キレット小舎(一一・一五)―BC(一二・三五)

アタックはいつもより早めにBCを出る。まだ暗い地獄谷を少しばかり下り、赤岳沢に入り偵察の時に目印を付けたガレを登りだす。最初は傾斜も緩いが、だんだん急に足首が痛くなるころに、右にトラバースし、倒木の間から天狗尾根の末端にでる。

まだ夜明けには間があるようだ。夜明けの富士を見ようと早目に森林限界まで登る。長い森林帯をうんざりするころ夜が白んできた。森林帯も終わりとなり岩場に出て小休止する。ザイル等の登攀用具を出して準備にかかる。壁は天狗尾根の側壁を形成していて、高さはそれほどでもないが傾斜はかなりのものだ。地獄谷が足下に見えるので高度

感もある程度出る。

ルートは左にトラバースし二〇mほどで太い灌木にビレ―し、続いて右上方のホルドスタンス豊富な岩を登ると尾根に出る。後はどこどころの岩稜を登れば大天狗に出る。大天狗は地獄谷側を二・三mトラバースしてからピークを目指して登る。このトラバースは高度感が出て、キレットがはるか下に見える。大天狗を下り小天狗を右に見ながら登り天狗尾根を終わり主稜に出る。

最高点の赤岳に登り、少しの休みでキレットに下る。キレット小舎から下山を地獄谷にとりシリセードで飛ばしながらBCに帰着した。



337 天狗尾根 森本・大野



■ 八ヶ岳東面・赤岳沢

(一九六二年・昭和三七年一月…記録…柳 穰)

パーティ：柳 穰・大野清吉

タイム：清里(六・三〇)―出合(九・一五)九・四五

―大滝上(一一・〇〇)―稜線(一二・一五)

―清里(一六・四〇)

晴れ上った空に両岸の紅葉が美しい。出合には九時一五分に着いた。この谷には初めての大野君に各ルートを説明し、九時四五分赤岳沢に入る。この仁三日風邪気味で少しフラフラしていたのだが、どうせ来たからには思いっきりやろうと、気持ち良い秋の日差しを浴びて遡行を開始する。約一時間、つまらないゴーロを行くと、小さな滝が三つあり、大滝の下に出る。

大滝は約三〇m正面はスラブで手がつかれないので右側の草付きを巻いて上に出る。ここは思わず「あつ、これはすばらしい」と叫ぶ。溪相は一変し、沢は一本のルンゼと化し、稜線めがけて駆け上がっている。青い空、赤茶けた岩の色、両岸の紅葉、静けさ、体の不調も忘れ、来てよかったとしみじみ思う。大野君も「いいですね」を連発している。彼はまだ二〇才、これからぐんぐん伸びていく好

青年である。私は若いパートナーと山に入るたびに、年齢を超越し、大自然の中、一つの目的に向かって、ともに力を合わせて登ることに新鮮な喜びを感じる。

ザックを開け、談笑のうちにエッセンを腹に詰め込む。「さあ行こう」。ルンゼはすぐ四〇度くらいの傾斜になり、その中に枚挙のいとまがないほどの大小の滝が次々と現れる。多少濡れているところでも、ビブラムの底が吸いつくように効き、快適に高度を上げる。大野君も「岩登りの練習にちょうどいいですね」などと言いながら一生懸命登っている。もう背後の飯盛山よりだいぶ高くなり、金峰山の尖岩ともほぼ同高度になった。

沢は傾斜を増し、ガレとなり、どん詰まりは稜線に着きあげる一〇〇m位の壁となる。正面は登れないので、右手の真教寺尾根側へルートをとることにする。カッーン、カッーンと小さな落石の音に振り仰ぐと、二人のパーティがアンザイレンして登って行くのが見える。しかしこのルートでアンザイレンするのは、岩のもろさと、確保点の少なさからしてかえって危険なので、私たちはノーザイル登り始める。左右に小さなトラバースを繰り返しながら一五〇mほど登り這松帯に入る。

背の立たない這松にだいぶてこずったがどうやら抜けて
一三時一五分に稜線に立った。集合は権現岳であるが、南
の方を見るとうんざりするほど遠く見える。あきらめて真
教寺尾根の下りにかかる。

四時五〇分の汽車に乗るべく半ば駆け足で下る。途中す
れ違ふ登山者との挨拶もそこそこにひたすら急ぐ。途中木
の間ごしに仰ぐ赤岳東壁が素晴らしい迫力で迫ってくる。
「今度はあれを登ろう」などと勝手な熱をふきながらひた
すら下る。

しかし何と長い尾根であることよ…。風のため少し発熱
してきた体にはそれを一層感じる。道はやがて牛首山を巻
き、傾斜も緩くなりようやく分岐点に出た。さあもう一息
だ…。広いすそ野にもようやく夕暮れが迫りふりかえる稜
線には残照がさびしく当たっていた。

■追憶…夏の地獄谷・権現岳の落雷…の記憶

登稜会の会報記録にはないが、東面の沢を詰め、権現岳
の山頂で落雷に会い髪の毛が逆立った。昔の権現小屋に逃
げ込んで雷の過ぎるのを待った…記憶がある。また、八ヶ
岳の長いすそ野を棒道まで下った…記憶も。



八ヶ岳・赤岳西面（登稜会）

■ 八ヶ岳西面合宿

（一九六一年・昭和三十六年：会報記録・柳 稷）

三月下旬の赤岳西面も今度（昭和三十六年）で三回目、恒例のようになつてしまつたが、少ない日数で入山・登攀できるのが魅力であり、私たちの積雪期登攀の鍛錬場であつた。長いすそ野を経て入山する時、彼方にそびえる白い峰々に限りない憧れを感じ、霜解け泥んこ道、粉雪のラッセル、雪の岩稜、そして下山の時に振りかえる峰々に懐かしさを感じつつ、再会を誓う我々であつた。近い将来これを基礎にしてより困難な積雪期の登攀に進みたいと思う。

ガタバスに揺られて農場に着くと待つていたように雨が降り出した。カサをさしたりビニールを体に巻きつけたり、みな思い思いのスタイルで泥んこ道に足を踏み入れていく。御小屋尾根への分岐を右に見るあたりで、すでに全員ハネだらけ。美濃戸で小屋の陰に雨をよけて、立つたまま飯を食ひ二週間前に預けてあつた荷物を分担して南沢に入る。今日は福居・中田両君がボツカに下ってくることになつているのだがどうしたのだろう。北沢で行き違いになつてい

るのかも知れない。

晴れていけば横岳の西面が一望できる雪原に差し掛かると、雨は風雪に変わり、今まで絶大な効力を發揮していた傘も役に立たなくなる。行者小屋の傍らの指導標にテント位置を書きつけた紙片が張り付けてあり、中山乗越へ百米近くいったところに見出す。しかしここではあまりに風通しがよすぎるので、行者小屋より阿弥陀の科尔寄りの森林のなかに持参したもうひと張とともに移動する。やがて行き違いになつた福居・中田両君が真つ黒な顔を見せ一段とにぎやかになる（三月一九日）。

…私の追憶…

昭和三十六年といえば私はまだ一九才、三月といえば高校卒業の間際（夜学なので四年生）・東京都に就職する直前で、正月の高校の冬山合宿（鳳凰三山）の直後だ。確か、登稜会で初めて冬の合宿だったように思う。思い出すのは、入山日に荷の重さで完全にバテて、意識もうろうとしていたこと、疲れすぎて何も食べられなかったこと、テントを張るのにもフラフラで何の役にも立てなかつたこと、などだ。

この合宿での登山・登攀はなにもない。高校の同級生で、山では先輩の星野が、キレット経由で権現岳に先輩と登つ

ているが、私はノーマルルートでの赤岳や阿弥陀岳すら登っていない。唯一、二〇日の柳兄・中村両先輩のシオルダリーリッジ登攀のラッセルサポートで取り付き付近までいった記録が残っている。二二日はもう下山している。就職の関係で予定が入っていたのかもしれない。

合宿の記録

三月一六日… 福居・中田が前夜発で入山

北沢経由で行者小屋周辺にテント設営

三月一七日… 福居・中田 阿弥陀岳北稜の登攀

三月一八日… 福居・中田 阿弥陀岳北西稜の登攀

平野入山

三月一九日… 高橋・柳兄・中村・鈴木・森本・大野

星野入山 平野下山

三月二〇日… 柳兄・中村 シオルダリーリッジ右稜

高橋・鈴木・森本 赤岳南峰リッジ

三月二一日… 柳兄・中村・鈴木 赤岳北峰主稜

柳弟・中田 赤岳北峰主稜

福居・星野 キレットから権現岳往復

高橋・森本・大野下山

三月二二日… 柳兄・中村・柳弟・鈴木・福居・中田・

星野下山

抜けるような青空、峰々は純白の姿を雪煙を上げつつクツキリと浮かび上がらせる。ポカポカとした陽射しはもう春だ。下山せねばならぬのが残念だ。みなのおんぴりと塗れ物を乾かしたり日向ぼっこをしたりしている。さらに精神年齢の若い無邪気な方々は、雪の斜面でエアーマットに乗ってわずかばかりの滑降を楽しんでいた。

入山時の緊張感に比べ下山の時は解放感がいっぱい。まして今日のように天気が良いとなおさらである。

美濃戸を過ぎ振り返ると、山々は残照に輝きとても美しい。ちよつぱり感傷的になりながらまた来る日を楽しみに農場へ急いだ(三月二二日)。



37年 中子一

八ヶ岳・稲子岳南壁（巻戻会）



■ 八ヶ岳稲子岳

（一九六一年・昭和三六年度会報：記録：柳 稈）

今回の合宿は、夏期・滝谷登攀、およびその後に行われる谷川岳一の倉沢を主とした岩登りに備えて全員が岩になじむことを目的として、入山、岩場までの取り付き、帰路の容易なこの岩場を選んだのである。

ルートも初級より上級まで採れ、岩の脆いこと、自然落石には充分注意した。ハーケンは厚手を一番多く用い、ついでに薄手、アイスハーケンも若干使用した。（岩場の）ピッチは平均六ピッチ（三〇mザイル）、帰路は（稲子岳）頂上より森林帯をニューウ付近で白樺林道に合流するように、七〇枚近くの赤布をつけ迷わないように配慮した。

この岩場は暇のない人達や、より大きな登攀を目指す場合のトレーニング場として好適と思うが、なめてかかっては駄目で、ルート自体は「直登ルート」が前穂・東壁クラス、「洞窟ルート」はハーケンがベタ打ちされている前穂・四峰の「松高ルート」より悪い感じだ。未だあまり多くの登攀者を迎えていないが、登攀中に眼下に広がる高原の眺めは広々として、一〇月の紅葉の頃のそれは特に見事である。何時までも静かにして置きたいところである。

合宿・期日：一九六六年四月二十九日～五月一日

参加者：高橋・柳(兄)・柳(弟)・山田・中村

鈴木・福居・星野・大野・沼野

●四月二十九日・入山

連休のため、中央線の茅野駅は列車の遅延も手伝ってこ
つたがえす。ようやく乗ったバスも立ち通し。おまけに「渋
温泉」の少し手前で下ってくるバスと入れ替えのため長時
間ストップ。気の短い連中は荷物を背負って歩き出し、あ
くまでもバス代をまっとうという執念の持ち主は車内に頑
張る。結局、渋温泉に先に着いたのは「短気組」がいくら



か早く、ささやかな優越感を持ってバスを迎える。登山道
にかかる橋のたもとで、朝兼昼食、しばらくして人影がま
ばらになったところで、皆いそいそと林の中に消え新陳代
謝を果たして健康なところを示す。

黒百合平付近は残雪が見られ、スリバチ池への斜面では
グリセードを楽しむ人たちがいた。予約してあったので快
く小屋に迎えられる。親切な良い小屋である。

写真は、登山再開後の同ルートで撮影。上から黒百合
ヒュッテ・中山峠・稲子岳南壁と山頂・ニューウの頂上。

四月三〇日・登攀日

中央ルート…柳(兄)・中村・柳(弟)
右フェース…高橋・星野・沼野
直登ルート…高橋・星野
左カンテ…山田・福居・大野
右フェース…山田・福居・大野
左カンテ…森本(本日入山)・沼野

五月一日・登攀日

南壁・洞窟ルート…柳(兄)・森本
東壁…柳(弟)・中村・星野
高橋・山田・鈴木・沼野下山・福居不調で停滞

中山峠を越え、残雪まばらな天狗岳・東壁を眺めつつ急降下ひとしきり、暗い森林帯を抜けると、左に稲子岳の岩壁が朝日を浴びて姿を現し、左カンテが鋭いスカイラインを画いていた。伐採地跡より左へ広い砂礫地を横切り林を抜けると、そこはもう南壁よりの押し出しの末端である。ガレを上り詰め壁下で健闘を誓い合って別れる。中央ルート以外のパーティーは東壁と南壁のコンタクトラインを下降したが下部では五〇m程のアップザイレンを行った。

新人の沼野・大野両君も始めての岩登りに一生懸命だった。鈴木君は不調で休息した。

●稲子岳・南壁・左カンテ

(記録…大野…同行…山田・福居…先輩)

「(南壁)直登フェース」ルートの基部の岩壁を左から大きく廻って「左カンテ」の基部を目指して登る。奥がルンゼ状になった基部をその手前の左側より取り付く。山田・大野・福居のオーダーである。

一ピッチは左から右へ斜めにトラバース気味に登る。セカンド・ラストはザイルを手繰りながら同時に登った。二ピッチは、灌木にビレーして、トップ(山田)がかぶり気味の所を登っていった。トップのOKの声にセカンド(大野)が登り始める。下から見た頭気味の所を腕力で乗り越すことができた。そこを過ぎるとリッジどおりに登り、カンテの右をトラバースして外傾テラスのトップの位置にいった。ジッヘルを交代してラスト(福居)にOKを送る。

三ピッチは、チムニーに入り三〜四m登って出ると左へトラバースする。バランスを有するところだ。大テラスに出テラストをジッヘルする。このとき同時にトップは傾斜の落ちたなだらかな四ピッチを登る。セカンド・ラストは続いて同時に登った。

五ピッチは、三つのルートが考えられた。ルンゼに一番近い赤く脆そうなガリーと、正面のクラックと、右のカン

テがそうだ。我々は正面のクラックにルートを取った。テラスから左斜めにトラバースし、直上するクラックに取り付く。

二m程でハーケンをうちホールドにする。体が右に振れそうになる。アブミに足をかけるがフラフラして不安定だ。右の高いところにホールドを探し、体重を託してクラックを出る。ラストはアブミ・ハーケンをはずすのに苦労する。このピッチでルートは終わりザイルをまいて広場に出た。

● 稲子岳・南壁・右フェース

(同行：山田・福居・先輩／記録：森本・先輩)

先の南壁・左カンテの登攀に続いて、同日に同じメンバ―で「南壁・右フェース」を登った(記録にある)。ただ、同行者の記録がないため、別日の森本先輩の同ルートの記録を参考までに紹介する。

右フェースは、エギューと称される奇異な岩塔一帯の大岩壁が急速に衰えを見せて、茶褐色のガラ場に消える右側に、孤立した岬のごとく判然と三角フェースを落としている。しかし、驚いたことに基部から仰ぐと四〇mにも満たない壁なのである。それで甘く見たトップが、基部の突き出した緩斜岩をコンテナアスで入り、ペラつとしたフェイス

に向かったが直ぐ撃退された。下の仲間が「寒いから早く登れ」と怒鳴るがキョロキョロするばかりでルートがわからない。右壁を見ると赤錆びたハーケンがあり、急いでトラバースして回り込むと、凹状にクラックが右傾斜気味に伸びていた。

このクラックに両腕をこじ入れ、寒さで堅くなる身体を丸くして登れば、クラックは五〜六mでフェースに遮られた。ルートはそこから左に灌木のある浅いバンドをトラバース。次のクラックは狭く、右足だけナールを突っ込み左足は風で乾いたフェースに快適なフリクションを利かせて登る。約二五mほどザイルが伸びてぼろぼろと石が落ちる外傾テラスに着いた。

上部を見ると左のガラ場に出てしまうほか無さそうで、ラストの指示で右壁に出ることにしてセカンドをあげる。眼下の樹海は黒々と茂った中に、橙色に映えた落葉樹を静かに点在させて、のびのびと広がり、その奥に硫黄岳が噴火壁をみせ拒むかのようなであった。

フェースを刻む僅かなリスにハーケンをたたくと小気味良く歌い、アブミをセットして乗り越す。なんとそこは三角フェースの頂点で、ガラ場がただっ広い頂上の灌木に向かっていた

八ヶ岳・黒百合平・天狗岳（大学：一九六七年・夏）

大学時代だが、高校時代のなじみの仲間との八ヶ岳山行であった。われわれ山の仲間三人組は、丹沢やここ八ヶ岳・南アルプスの縦走・珍しいところで東北の飯豊連峰など、いろいろと歩き回っている。

この時の山行も、Fの写真帳から判明した。コースとしては多分、渋の湯から黒百合平、テント泊して天狗岳に登った、と写真から想像できる。テント場の写真（カラー・



白黒）二枚と、天狗の庭の岩峰を登っている写真、その途中から黒百合平のヒュッテを望む写真が残っている。帰りは稲子岳の写真があることから、中山峠へ下ったようだ。他へも回ったのかもしれない。



八ヶ岳・天狗岳・白駒池（大学…一九六七年・秋）

大学の友達との山行は二回ある。二度とも女友達のガイド兼ボツカ役（あるいは用心棒？）だった。東北の飯豊連峰と北八ヶ岳を訪れている。

北八ヶ岳山行は、私を入れて三人、一人は今でも名女優として映画への出演やテレビのCMで活躍している。もう一人は、その人と一番仲の良かった友人で、私と同じ公務員で、私とも仲が良かった。その繋がりで行った。



茅野から渋温泉経由で黒百合平に出て、天狗岳に登り、中山峠・高見石を歩いて、白駒池に出て白駒荘に泊り、翌日に高見石から渋の湯へと下った…のではないかと思う。写真（別の山行で撮影）は上から、天狗岳・奥庭からの黒百合ヒュッテ・白駒池（栈橋は当時もあった）・白駒荘。

私は、彼女らと別れ、独りで茅野駅から伊那北駅へ回り、南アの戸台川から北沢峠へ登った。昔の無人の長衛小屋に泊り、翌日は降雪で、仙丈岳または甲斐駒ヶ岳への計画がとん挫したことを思い出す。今現在は、二人とも交信はない。若い日の懐かしくも甘酸っぱい思い出だ。

